

**瀬戸大橋建設に伴う
埋蔵文化財調査概報(Ⅱ)**

羽佐島遺跡

1979・3

香川県教育委員会

例 言

1. 本書は、瀬戸大橋架橋工事に伴って、1978年7月17日から1979年3月24日まで実施された坂出市羽佐島^{わさじま}遺跡の発掘調査概報である。
2. 本調査は、本州四国連絡橋公団から委託を受けて、香川県教育委員会が実施した。
3. 発掘調査は、文化行政課主任技師牟礼良典・齊藤賢一・技師渡部明夫・大山真充・唐木裕志・藤好史郎・山本哲也・嘱託大砂古直生が担当し、白本清・西村尋文が補助した。
4. 調査の実施にあたっては、与島瀬戸大橋対策協議会・同自治会はじめ、与島・岩黒島・瀬居島の方々、および多くの機関・個人から多大の協力を受けた。記して甚深の謝意を表したい。
5. 本報告の執筆分担は、I一大砂古直生、II一齊藤賢一、III一山本哲也、IV一渡部明夫、V一渡部明夫である。ほかに、本報告製作のため、四国学院大学学生・明善短期大学学生の補助をえた。
6. 本報告の編集は山本・渡部がこれを行った。

目 次

I はじめに.....	1
II 調査の方法と経過.....	3
III 層序と遺物の出土状況.....	8
IV 遺 物.....	15
V おわりに.....	21



調査前の草刈り風景

挿 図 目 次

第1図 偏讃瀬戸の位置.....	2	第4図 羽佐島地形図.....	5
第2図 羽佐島の位置と偏讃瀬戸の地形.....	2	第5図 羽佐島遺跡発掘調査区.....	7
第3図 羽佐島遺跡発掘状況.....	4	第6図 B17～B20グリッド 第4面（右上） B20東端の遺物集中箇所.....	11

図 版 目 次

図版1 B1グリッド遺物出土状態（第1面～終了）		図版38 (1) A31-1グリッド東壁	
〃 2 B2グリッド（第1面～第3面）		(2) 同上・南壁	
〃 3 B2グリッド（第4面・第5面）		(3) 羽佐島遺跡・北部調査風景（南より）	
〃 4 B6グリッド（第1面）		〃 39 (1) A36-1グリッド遺物出土状態（西より）	
〃 5 B6グリッド（第2面・第3面）		(2) 同上・東壁	
〃 6 B7～B10グリッド（第1面）		(3) 同上・南壁	
〃 7 B7～B10グリッド（第2面～第5面）		〃 40 (1) ナイフ形石器（背面）	
〃 8 B7～B10グリッド遺物及び礫出土状況 (第1面～第5面)		(2) 同上（腹面）	
〃 9 B16グリッド（第1面・第6面）		〃 41 (1) ナイフ形石器（背面）	
〃 10 B20グリッド（第1面～第2面）		(2) 同上（腹面）	
〃 11 B20グリッド（第3面・終了）		〃 42 (1) ナイフ形石器（背面）	
〃 12 B21グリッド（第1面～第2面）		(2) 同上（腹面）	
〃 13 B21グリッド（第3面～第5面）		〃 43 (1) ナイフ形石器（背面）	
〃 14 B21グリッド（第6面～第8面）		(2) 同上（腹面）	
〃 15 A26-1グリッド（第1面～第3面）		〃 44 (1) ナイフ形石器（背面）	
〃 16 A26-1グリッド（第4面・第5面）		(2) 同上（腹面）	
〃 17 A31-1グリッド（第1面・第2面）		〃 45 (1) ナイフ形石器（背面）	
〃 18 A31-1グリッド（第3面・第4面）		(2) 同上（腹面）	
〃 19 A36-1グリッド（第1面～第4面）		〃 46 (1) 切出し形ナイフ石器（背面）・両側縁 加工石器（背面）	
〃 20 A36-1グリッド（第5面・第6面）		(2) 同上（腹面）	
〃 21 羽佐島出土石器実測図1)		〃 47 (1) 削器	
〃 22 " " (2)		(2) 同上（裏面）	
〃 23 " " (3)		〃 48 (1) 斧状石器	
〃 24 " " (4)		(2) 同上（裏面）	
〃 25 " " (5)		〃 49 (1) 舟底形石器（背面）・截断面ある石器 ・石錐（背面）・多面体の石核・円盤 状石核	
〃 26 " " (6)		(2) 同上（腹面）	
〃 27 " " (7)		〃 50 (1) 尖頭器	
〃 28 " " (8)		(2) 同上（裏面）	
〃 29 " " (9)		〃 51 (1) 突状剝片石核（上面）	
〃 30 " " (10)		(2) 同上（下面）	
〃 31 (1) 羽佐島遺跡（北より・調査前）		〃 52 (1) 横長剝片石核	
(2) 同上（南より・調査前）		(2) 同上（裏面）	
(3) 同上（グリッド設定状態）		〃 53 (1) 突状剝片（背面）	
〃 32 (1) B1グリッド遺物出土状態（西より）		(2) 同上（腹面）	
(2) B1グリッド南壁（中央部）		〃 54 (1) 突状剝片（背面）	
(3) B1グリッド西壁（北側）		(2) 同上（腹面）	
〃 33 (1) B6グリッド遺物出土状態（南より）		〃 55 (1) 横長剝片（背面）	
(2) 同上（グリッド東側・南より）		(2) 同上（腹面）	
(3) 同上（西より）		〃 56 (1) 縦長剝片（背面）・細石刃（背面）	
〃 34 (1) B2～B5グリッド遺物出土状態（南よ り）		(2) 同上（腹面）	
(2) B7～B10グリッド遺物出土状態（第3 面・南より）		〃 57 (1) 縦長剝片石核	
(3) 同上（第4面・南より）		(2) 同上（裏面）	
〃 35 (1) B16グリッド遺物出土状態（南より）		〃 58 (1) 細石刃核	
(2) 同上（西より）		(2) 同上（裏面）	
(3) 同上（東より）		〃 59 (1) 叩き石	
〃 36 (1) B20グリッド東壁		(2) 同上（裏面）	
(2) B21グリッド遺物出土状態（東より）		〃 60 (1) 石礫	
(3) 同上（南より）		(2) 同上（裏面）	
〃 37 (1) A26-1グリッド遺物出土状態（西より）			
(2) 同上・南壁			
(3) 同上・東壁			

I はじめに

羽佐島は、備讃瀬戸のほぼ中央の塩飽諸島東部に位置する小島である。坂出港より北方6kmに位置し、北方800mに岩黒島、南方200mに与島、西方1,500mに本島を控える無人島である。

島は南北に細長く、両端に2つの頂部をもち、北側頂部がやや高く、標高32mを計る。島の総面積0.03km²で、海岸線の総延長は1.3kmを計る。島の周囲は、東側以外は崖面になっている。東側は干潮時には砂浜となっている。島は花崗岩を基盤として、成立しているが崖面を除くと、南側は松林、北側は、カヤ・ササ・ツタなどによって、全面をおおわれていた。

羽佐島は現在無人島になっているが、近世初頭には人が居住していたことが文献に見られる。^(注1)また戦後しばらくは、採石・畑作の為に人が住んでおり、その痕跡が鞍部の削平地や北東部の採石跡に見ることができる。

羽佐島における遺跡の所在は、あまり知られてなかった。昭和47年県下一円で行われた分布調査、坂出市全図（史跡・天然記念物および埋蔵文化財包蔵地所在図）に初めて、旧石器分布地として記されている。

羽佐島での発掘調査は、昭和52年10月4日から10月31日まで行われた、海峡部埋蔵文化財予備調査（県教委）がはじめての調査であった。^(注2)調査は、南の丘陵を中心に行われ、剝片や碎片を中心に、ナイフ形石器・削器等の製品が出土している。調査が島南部で行われたので、島全体についての分布を詳しく知ることはできなかった。

註

(1) 香川叢書

(2) 『瀬戸大橋建設に伴う埋蔵文化財予備調査報告』(1)香川県教育委員会 1978



第1図 備讃瀬戸の位置

(大槌島)

瀬戸内海

五色台

香川県

第2図 羽佐島の位置と備讃瀬戸の地形
(図の上が北)

II 調査の方法と経過

1. 遺跡の範囲

これまでの調査により、羽佐島における旧石器時代遺物の分布は尾根筋を中心にならに広い範囲にわたっていることが予測された。しかし、地形から考えて海岸線沿いの急な傾斜面や岩場には遺物の散布は望めなかった。また、発掘に伴い南の丘陵の南東斜面を切り開いて階段を設けたが、その際遺物の出土は認められなかったので、この斜面も分布の可能性は低いように思われた。したがって、羽佐島における旧石器の分布範囲は海岸線に沿った急傾斜面を除き、南の丘陵平坦部から北の丘陵の平坦部に至る尾根筋を中心とした斜面上部と考えられる。

2. 調査区画の設定

工事区域に含まれた遺跡は全面発掘を原則として調査区画を設定した。調査地区は尾根筋と丘陵東・西斜面にあたるため、西側斜面をA地区、尾根筋上をB地区、東側斜面をC地区とした。B地区は尾根筋の最大幅である東西10mをとることができ、南北は真北方向に4m毎に区画した。A地区・C地区はB地区に準じ南北は4m毎に区画したが、東西は斜面であることを考慮して8mを1単位とした。したがって、尾根筋であるB地区は東西10m南北4m、斜面部であるA・C地区は東西8m南北4mを単位とするグリッドを調査地区全域に設定したことになる。各グリッドの名称は、調査地区的南端より1・2・3…とし、A・C地区的斜面部下位にさらにグリッドが設定できる場合には、上位よりA36-1、A36-2、A36-3、C11-1、C11-2などの名称を付した。調査は基本的には表土から最下層までのすべての出土遺物の位置とレベルを記録することにして始められた。しかし、調査途中で土器片や近・現代の遺物の混入の著しい表土及び第2層は遺物の一括取りあげを実施した。その場合には2×2mを単位とし、B地区については南北にs・n；西端からa・b・c・d・eとし、as・an区などと呼ぶことにした。また、A・C地区については丘陵上位から下位に向ってa・b・c・dと区画し、B地区と同じくas、an区などと呼んだ。調査区の設定は、採石や自然崩壊のため調査予定地の全域に設定することはできなかった。A地区は南から北に向ってA1からA42までが設定されたが、A6・A36で最も西に延びA6-3、A36-5まで設定することができた。B地区は南の丘陵北斜面から中央鞍部にかけて26のグリッドを設定した。B16～B18は建造物などのため地形が若干削られていた。C地区はC2からC21までを設定し、C8で最も東に延びた。各地区とも縁辺部は工事区域と地勢に制約され、不定形なグリッドとなった。

3. 調査の経過

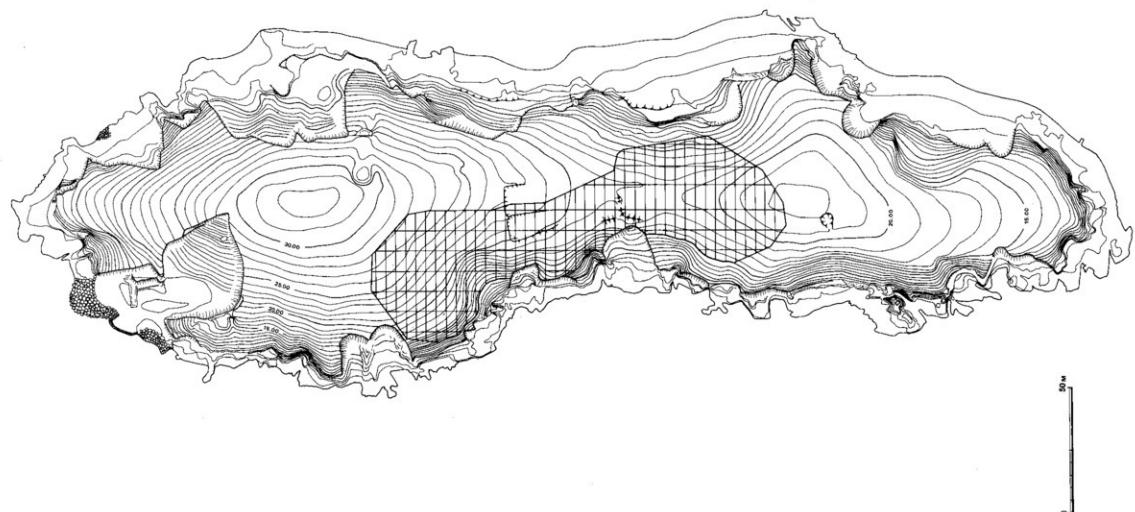
調査は、遺物の出土量が多く見込まれた尾根筋を優先して精査することとし、且つ遺物の分布状態を把握する必要もあり、B地区の1・6・11・16・21・26及びA地区の26-1、31-1、36-1の順序で開始した。これらの調査により尾根部の遺物分布状態の概略を確認した。ついでB2～B5・B7～B10・B12～B15・B17～B20について、4グリッドを1単位として面的な調査を行った。この結果、B7からB10にかけてやや西寄りに中心をもつユニット状の遺物集中箇所が見られた外、B20の東端でも約2×1mの範囲で遺物の極めて集中する地点が検

出されたため、調査はより慎重にならざるを得なかった。B地区の調査はほぼ12月に終了し、次いでA地区の北部丘陵西斜面に移った。A36においては西へ5つのグリッドを延長して調査に着手するとともに、A27-1からA38-1も併行して調査した。北部丘陵は南部丘陵と異なる土層序を呈す。南部丘陵における第2層と第3層の間に土器片を多数包含する黒褐色土層が介在し、それ以下ではほとんど土器を含まない。

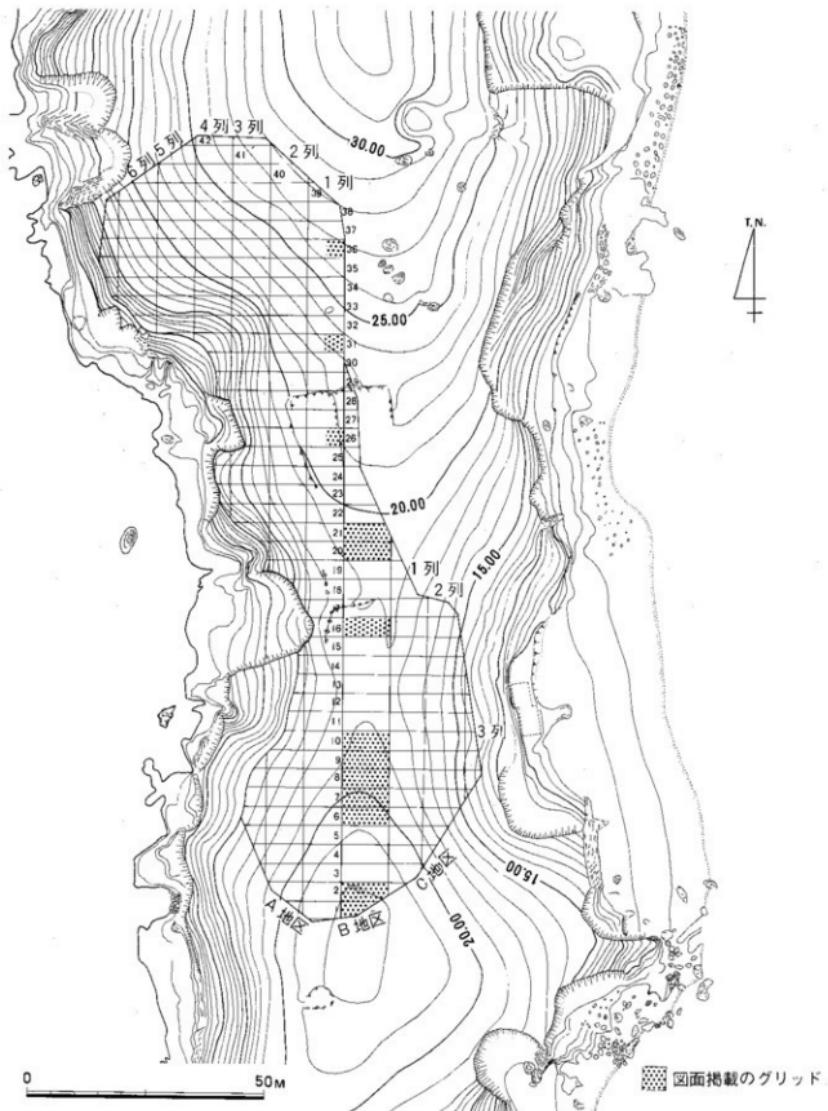
調査は現在尾根筋部分を終了し、丘陵の東西斜面部にかかっている。またこれと併行して、これまでの成果に基づき土器片を多く含む第1層及び第2層は2m方格で一括取りあげし、第3層より精査する方針に基づき進行中である。予備調査の結果から予想された以上の遺物包含層の広がりを見たことなどにより、予定を遅れることになった。しかし、現在調査が継続されている区画には、遺物が集中して出土したB7からB10の西側に当るA7からA10や、B20の東側に当るC20がある。このため、調査は慎重かつ合理的に行えるよう鋭意努力中である。



第3図 羽佐島遺跡発掘状況



第4図　羽佐島地形図



第五図 羽佐島遺跡発掘調査区

III 層序と遺物の出土状況

1. 調査地点と調査方法について

羽佐島遺跡の本調査が進行するにともなって、予備調査の時点で予測された遺物出土状況を凌駕する多量の旧石器時代遺物の出土をみた。なかでも、現在までに確認された遺物の平面分布のなかで、きわめて遺物の集中分布を呈する地点が存在することが判明している。こうした点をふまえながら、遺跡のごくわずかな部分像であるものの、現在までに得られた知見を基に、遺跡の概要を述べることにする。本遺跡の場合、瀬戸内海に所在する島であるため、下記の点を考慮して、概要報告となした。①調査区域のなかで、最も自然的制約の少ないと思われる島尾根上部分の調査区をとりあげることにした。②とりあげた、島尾根上部分の調査区は、主として遺物残存状況を如実に示す場所に限った。③遺物出土状態の図化にあたっては、縮尺1/20のもとに、島南部の調査区でB区が $2\text{ m} \times 2\text{ m}$ 枠内の実測（一部平板実測）、島北部の調査区A区は主として平板実測として現地での実測作業を行った。また、遺物については、一点一点についてレベル高を記入し、残存状態の復原が可能であるようにした。④遺物出土状態の垂直分布状況として、断面図に投影するにあたり、地形的側面を配慮して、各ポイントから1m範囲内での遺物の投影にとどめた。⑤遺物は、主要な部分について、平面図と断面図とともに記号化して分離作業を行った。その他の部分については、平面図についてのみ記号化の分離作業を行い、断面図は土器とサヌカイト製（但し、叩石等のサヌカイト外の石材製品等は含む）旧石器時代遺物の分離を行った。概報の段階で、不充分な整理作業も多いが、本報告書でもってこうした未整理部分について検討を加え、さらに内容を充実させてゆきたいと考える。また、多様な視点からの観察も加え、より一層検討作業を遂行してゆきたい。

注1 『瀬戸大橋建設に伴う埋蔵文化財予備調査報告』(1) 1978

2. 層序と遺物の出土状況

①遺物の残存状況 遺跡からは、旧石器時代から近・現代に至る各時期の遺物が出土しているが、ほとんど旧石器時代の遺物が占める。遺物の出土量は、地点によって若干の様相が異なるが、全体の出土状況からみれば、概ね尾根上部分からの出土数が多い。さて、本遺跡は現在無人島である状態から、頻繁な人間活動が、現時点ではまったくなされていないことからして、人為的攪乱の範囲が限定されている。こうしたことから、当初、ある程度の遺物の良好な出土状態が期待された。調査の結果、部分的に明らかに近・現代の人為的攪乱の痕跡を示す状況がみられた。特に島中央部分においては、表土層から地山面である花崗岩バイラン土壤まで一貫して攪乱している地点がみられ、遺跡は部分的に、後世の攪乱を強く受けていることが判明した。攪乱の時期と原因については、昭和初期に羽佐島において生活が営なまれ、また本島の母岩が花崗岩であるために、一時期石材産業が営なまれた事実もあって、昭和のある時期に羽佐島において頻繁な人間活動がみられ、それにともなう畑地とか作業場、家屋等が存在したことが現在知られており、先に述べた如くの島中央部分における攪乱は、多くがこの時期の要因に求められる。

旧石器時代以外の遺物として、石鏃・弥生土器（畿内第5様式期甕片）・須恵器（甕片）・

中世土器（瓦器椀片・土釜片・土師質小皿）・中・近世陶器片等が出土している。なかでも、中世におかれる土器片が多い。旧石器時代遺物出土状況は、島南部調査区において、第I層からこれら上記の遺物とともに出土をなし、島北部調査区では、第II層から混在して出土している。本遺跡の土層序の概略を述べれば、基本的に島南部調査区で5層に、島北部調査区で6層に区分できる。その中で、島南部調査区におけるIV層と、島北部調査区におけるV層は、ブロック状の土壤組成を有する灰褐色土層であり、質自体が非常に固くしまっているために、上層とは明確に区別できる。この灰褐色土層より上層の土層は、羽佐島遺跡の南と北の調査区でその呈する様相は異なっている。例えば、北部調査区におけるIII層は、暗褐色の土層であり、中世の土器を多く含む。この暗褐色の土層は、南部調査区では、まったく見受けられない。この様に、土層自体の呈する状態は、調査区の南部と北部とで微妙に異なっている。これは、各々の地区における、土層堆積の条件の違いを物語るものである。ただ、付け加えておきたいことは、先に述べたごとく、旧石器時代遺物以外の時期のものとしては、中世の土器片が多い点である。これは、羽佐島遺跡の南部調査区、北部調査区とともに出土がみられ、本遺跡における中世の人間活動の痕跡を、広範囲なものとして、推測せしむるものである。次に、羽佐島遺跡における遺物出土状況を、各グリッドを通じてもう少し詳しく述べることにする。

B1グリッド B1グリッドは、調査区域の南端にあたり、羽佐島南側の頂部よりやや北向に傾斜する斜面部に、設けられたグリッドである。旧石器時代の遺物は、I層からIV層上半までにかけて検出された。I層からII層にかけては、旧石器時代遺物は、他の時代の遺物と混在した状態で見出された。III・IV層においては、上層と比べ他の時代の遺物混入は減少するが、数点見出される。つまり、特定の層に、限られた文化時期の遺物のみがみられるといった現象は、見出せなかった。平面的な遺物分布も、遺物は散在した状況であった。図版1・32。

B2グリッド B2グリッドは、B1グリッドの北に接する調査地点である。B2～B5グリッド間、160m²の範囲で調査を行った。調査の方法として、調査区を一定の深さで発掘し、任意の面を設けて、実側及び遺物の取りあげを行った。B2グリッドの場合、図化した1～3面は土層序のI層～III層上半に、4～5面はIII層・IV層にかけての層中に該当する。遺物は、I層からIV層上半にかけて出土する。うちでも、I層からII層においては、旧石器時代遺物が中・近世の土器片とともに混在して出土している（1～3面図参照）。III層からIV層にかけては、遺物の出土そのものが減り、土器の出土が極端に少なくなる。遺物の内容としては、B2グリッドの場合、細石刃・細石核の出土が多いことが注目され、グリッドの東側部分の範囲内に集中する傾向がみられた。また、B2グリッドから出土した細石核で、石材はサヌカイトであるが他のサヌカイト遺物にくらべ玻瓈質化している点で、内眼でも容易に他のサヌカイトと区別されるものがある。この細石核と同質のサヌカイト片が多数グリッド東側部分から検出されており、こうした現象面から、B2グリッドの遺物平面分布状況のなかで、東側部分の遺物出土状態は、興味をひく。しかし、こうした遺物は、土器片と混在している状態なので、どこまで現位置を保持しているものか述べることは難しい。ここでは、B2グリッドで出土した遺物の包含状態のなかで、興味をひく遺物散布が認められた事実のみ指摘しておきたい。図版2・3・34-(1)。

B6グリッド B6グリッドは、羽佐島南頂部より北へ向かってのびるなだらかな傾斜面上に設定された発掘区である。第1面（I層・II層）での遺物出土状態からすれば、土器片

の混入がきわめて著しいことがあげられる。第2・3面(Ⅲ層・Ⅳ層)の状態においても、上層の混入状態は繼いており、旧石器時代遺物の残存状況は、原位置の状態を問題にするならば、きわめて悪い状況であると言える。土器片は、中世のものが多いが、ほとんどのものが細片化している。遺物の内容をとりあげれば、旧石器時代遺物のなかで製品の出土がごくわずかであり、それにあって、火を受けた状況を呈する自然礫の出土が多いことが観察される。けれども、先に述べた如く、土器片等の存在から、自然礫のすべてが、原位置を保っているものとは決して言い難い。ただ、マクロ的にみて、B6グリッドの遺物の出土状態が大規模な二次移動での結果でなければ、この自然礫の出土状態(包含状態)は、羽佐島遺跡のなかで、注目される一現象であると言えよう。図版4・5・33.

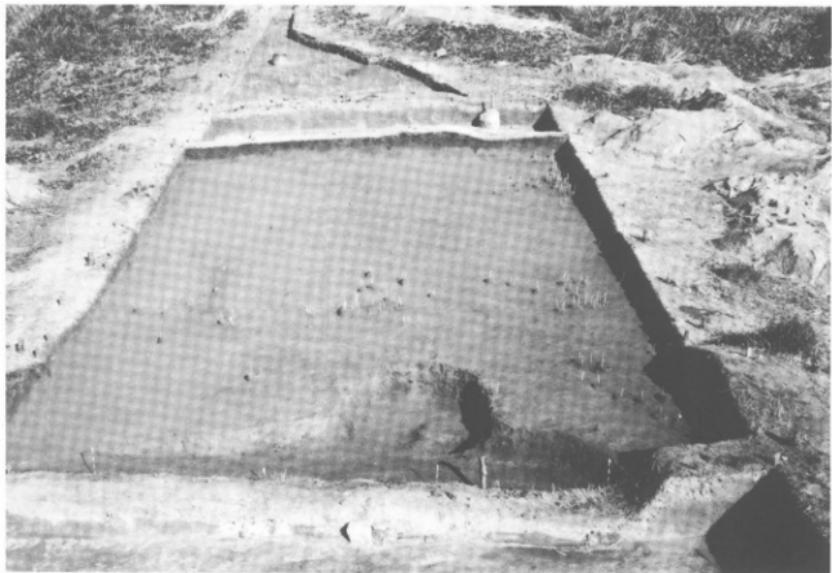
B7～B10グリッド B7～B10グリッドは、B6グリッドの北に接する160m²範囲の調査区である。この調査区において、注目すべき旧石器時代遺物の集中がみられた。第1面から第5面にかけての、旧石器時代遺物出土状態を重ねあわせると、B7・B8グリッドを中心とした、遺物集中箇所が存在することが認められる。平面的な遺物集中状況とともに、垂直分布状況も同様な遺物の濃厚な集中状態を示す。さて、この集中状態が確認されたのは第2面以降であって、第3面から第5面に至るまで、第2面で認められたB7・B8グリッドを中心とする遺物集中傾向が続くものであった。つまり、第1面では遺物散布が散在的であったのが、第2面以降明確な状態で検出された遺物集中箇所であると言える。第1面が、第I層～第II層の遺物包含様相があるので、厳密にはこの遺物集中は、第Ⅲ層から第Ⅳ層上半にかけての出土状態である。ただ第1面(第I層・第II層)では、第2面以降にくらべて、土器を主とした旧石器時代以外の遺物の出土が多いので、搅乱の要素を考慮するならば、第Ⅲ層・第Ⅳ層にかけて本来遺物集中が存在していたとは決していえない。現状では、遺物取りあげ面である第2面以降に、遺物集中が存在していた事実のみ呈示しておきたい。

第2面～第5面の遺物出土状態のなかで、遺物の内容を観察すれば、B7・B8を中心として、製品の集中が多い事実に気づく。特に、ナイフ形石器、翼状剝片、翼状剝片石核、叩石等の存在が目につく。その他の、サヌカイト碎石(チップ・フレイク)の分布が、この製品集中箇所に集約しており、全体として、B7～B10グリッドにおける遺物集中箇所を構成していることは、興味を促す問題である。但し、第2面～第4面において、小片であるものの土器片が混入していることは、この遺物集中箇所そのものに疑問の余地をさむ視点となりえる。ただ、土器片の出土をもって、この集中箇所の存在そのものを、単なる遺物包含層の一現象として或いは人為的搅乱の二次移動堆積現象として否定することは、大いに憂慮すべき問題であると思われる。すなわち、土層観察からしても、第2面(第Ⅲ層・第Ⅳ層)以降における大規模な人為的搅乱の痕跡は認められなかったし、B7～B10グリッド周辺の地形を考えあわせても、B7・B8グリッドを中心とする遺物集中箇所の遺物一点一点が搅乱移動の結果として存在することは決して考えられないからである。とすれば、土器片の存在はいかなる要因に求められるかという問題が生じる。B7～B10グリッドにおける土層は、非常に浅く、しかもI層～Ⅲ層はわりと軟い土質であって、木の根や雑草根が容易にはいりこめる条件を有している。事実、Ⅲ層～Ⅳ層中に多くの根が侵入してきており、こうした自然条件は他の生物活動条件と相俟って、いわゆる自然搅乱の条件を充分保有している。上層から下層へ遺物が移動することは、根の腐蝕・もぐらの活動等による可能性が非常に高い。第2面～第4面の土器片のすべてが、こ

うした自然搅乱の結果、出土しうるとは言い切れないまでも、確率の高い現象の結果とは言えよう。従って第2面～第4面に土器片があるという事実からして、B7・B8グリッドの遺物集中箇所を旧石器時代以外の時期の影響の結果として考えることは非常に危険であると思われる。むしろ、旧石器時代人の残した生活現象の結果として理解すべき問題であろう。確かに、きわめて明確な遺物出土状況として（文化層中よりの発見ではないので）把握することは難しいが、注目すべき現象であると言える。B7～B8グリッドにおける遺物集中箇所については、周辺の調査とかねあわせて、なお一層の検討作業を進めてゆきたい。集中箇所の存在の示しにとどめるものである。図版6～8-34-(2)・(3)。

B16グリッド B16グリッドは、羽佐島の尾根中央部にあたる調査地点である。B16グリッド設定前から、グリッド周辺部が削平された地形をなしていた。調査の結果、遺物を含した土層が残っていたのは、グリッド東側の一部分のみであることが判明した。かろうじて残存していた部分を除いて、グリッド中央部から西側は、第IV層をわずかに残して大幅に削られている。然も、グリッド中央部北壁側には、何らかの建物の礎石に使用されたと思われる花崗岩切石が残っていた。搅乱を受けていないグリッド東側部分の、遺物出土状況は、第I層～第III層まで、土器片の混入が非常に多かった。B16グリッド周辺は、人為的搅乱の明確な地点であり、遺物の包含状態を詳しく調査することはできなかった。図版9・35。

B20グリッド B20グリッドは、羽佐島北頂部より南向きにのびる尾根上の平坦地形部分に



第6図 B16～B20 第4面（右上がB20東端の遺物集中箇所）

設定された調査地点である。B20グリッドでは、明確な遺物集中箇所が確認された。第Ⅰ層は、攪乱を受けた土層であることが判明していたので、2m×2m枠内で第Ⅰ層中の遺物は取りあげを行った。第1面から第2面の2までの遺物出土状態としては、平面分布上グリッド東側に、遺物がわりあい集中する傾向があった。しかし、土器片の混入が多く、第Ⅲ層上半までに土器の占める量は多い。だが、第3面の1以降、土器はまったくみあたらなくて、しかもグリッド東側部に、明瞭な遺物集中箇所が認められた。第3面の1～第5面にかけては、グリッド東側部分にのみ遺物が出土して、平面的にも集中箇所としてとらえることが容易な状況であった。遺物の出土状態を、グリッド東壁に投影すると、明らかに第Ⅲ層下半から第Ⅳ層にかけて、遺物集中をなすことに気づく。集中箇所の形状は、ピット状の様相を呈しているが、土層の観察からは、ピット状遺構として土質を区別することは困難であった。この、遺物集中箇所は、第Ⅳ層下半まで遺物集中がみられ、B1～B16等でみられた遺物出土状態が第Ⅳ層上半で終結している点を考えあわせると、きわめて特異な状況を呈している。

出土した遺物の内容をみると、遺物のすべてが旧石器時代に属すると考えられる物である。然も第3面の1以降には土器を中心とした旧石器時代以外の遺物がまったく出土していないことからして、遺物集中箇所の遺存条件は良好であったものと思われる。遺物自体を詳しく見るならば、製品の出土はまったくなく、ほとんどフレイク・チップ等のサヌカイト碎片で占められていた。従って、このB-20グリッド遺物集中箇所は、フレイク・チップ等のサヌカイト碎片で構成された集中箇所であると言える。遺物の遺存条件や出土状態からすれば、今後注目されるべき集中箇所である。第6図・図版10・11・36-(1)。

B21グリッド B21グリッドは、B20グリッドの北に接する調査地点である。グリッドから出土した旧石器時代遺物は非常に多く、周辺の遺物出土状態のなかで、きわだってB21グリッド遺物出土点数は高かった。遺物内容としては、ナイフ形石器、マイクロコア、マイクロブレインの出土点数が多い。第Ⅰ層・第Ⅱ層にかけては、寛永通宝の出土からしても攪乱の強い層であることがわかる。第Ⅲ層・第Ⅳ層では、若干の土器も含まれるが、遺物としては製品の出土が多いのが目につく。ただ、平面的な遺物の散布からすれば、散在的であって、集中箇所は存在しなかった。図版12～14・36-(2)・(3)。

A26-1グリッド A26-1グリッドは、島北頂部より南にむかってのびた尾根上の、中央や西側部分に位置する調査地点である。A26-1グリッドをふくめて、それより西側の地形は、人為的に平坦に削平された状況を呈していて、建物があった状態を示している。従って、A26-1グリッドは、グリッド東側の一部を残して、ほとんど人為的な攪乱でもって、本来の堆積土は削除せられていた。遺物の包含する土層が、わずかに残存していたグリッド東側部分において、第1～3面(Ⅰ～Ⅲ層)で、製品を主とした旧石器時代遺物が少數検出された。第4・5面(Ⅲ層・Ⅳ層)にかけての遺物出土は、非常に少なかった。図版15・16・37。

A31-1グリッド A31-1グリッドは、島北頂部より南に向かう尾根上の南西傾斜面に設定された調査地点である。第1面・第2面(Ⅰ層～Ⅲ層)で示された遺物出土状態をみると、土器の混入がきわめて多いことに気づく。然も、A31-1グリッド範囲内(16m²)において広範囲に土器片の接合が認められ、土器片の移動からすれば、攪乱の痕跡が濃厚である。土器が出土していない第3・4面の遺物出土状態をみても、遺物が集中する傾向はなく散在的であって、出土点数そのものも少ない。A31-1グリッドにおいて、グリッド東壁南側では、第Ⅱ層

・Ⅲ層で土器片が密集していた。図版17・18・38-(1)・(2)。

A36-1グリッド A36-1グリッドは、島北頂部より南へ傾斜する尾根上部分に設定された調査地点である。第1面～第4面の遺物出土状態が示すごとく、第I層～第III層においては、土器片の出土がきわめて多い。なかでも、第III層は羽佐島南部調査区ではみられない暗褐色土層であり、中世の土器片を多量に含んでいた。第I層～第III層は、A31-1グリッドに継続して、土器片の出土数が著しく、搅乱をうけた堆積土であると言える。土器片の出土しなくなつた第5・6面（第IV層・第V層）では、遺物の出土数は少なく、平面分布も散在している状況であった。遺物はV層上面までしか出土しなかつた。図版19・20・39。

②遺物出土状況の問題点（特に層位との関連にふれて）

これまでに羽佐島遺跡において、明確な文化層なり、遺構の存在はまったく確認されてはいない。旧石器時代の遺構検出はともかくとして、旧石器以降から中・近世の遺構すら見出せなかつた。その原因是、本遺跡における堆積土の諸条件によるものと考えられる。各グリッドの説明で、とりあつかったグリッドのほとんどは大量の流土として再堆積したものと考えにくい尾根上部分に、設定されたグリッドである。それにもかかわらず、堆積した土層から出土する遺物によって、文化層の区分をなし層序区分を行うことはまったくできなかつた。従って、本概報で使用している土層区分は、主として視覚的ないしは土質の相違から分けられたものであつて、決して連続する文化層の分離、つまり一層一層が相異なる文化時期の諸相を反映したものとして区分されたものではないことを明記しておきたい。こうした、文化層分離の困難さは、堆積土の希薄さや根などによる自然搅乱の多さに要因が求められる。また、姶良火山灰層に代表される火山灰層の検出も肉眼では確認されず、地質学的な検討作業（土壤分析）を待たねばならぬ現状である。土質の相違を問題とするならば、本遺跡で明確に分離できうるのは、調査区南部の第I層～第III層と第IV層、調査区北部の第I層～第IV層と第V層である。この、南部調査区の第IV層と北部調査区の第V層とは、硬いブロック状組成を有する灰褐色土のことであり、上層と分離することはたやすい。上層は、比較的軟かい土壤であり、微妙な色調等の相違によって区別しているものであつて、土の保存条件からすれば、下層におけるこれら第IV層・第V層の堆積状態とくらべて軟弱であり条件も悪い。但し、すでに述べてきた如く、B7～B10グリッドおよびB20グリッドで検出された遺物集中箇所の存在は、土層の問題と相俟つて、多くの問題点を有している。特にB20グリッドにおいては、旧石器時代遺物単独の集中箇所であつて、しかも第III層下半から第IV層にかけて集中していることなどは、層位的な問題をなおさら複雑化さしている。むしろ、堆積する層序を、色調・土質の相違から地質的に分離するだけではなくして、遺物の垂直分布・平面分布から文化的範囲における諸行為の分離として、旧石器時代の生活跡の痕跡の可能性を追求してゆかなければならぬであろう。火山灰層の存在の可能性として地質学上の検討作業を進めて行く上で、上記の問題も考慮して、本遺跡における遺物残存状況の検討をさらに進めて行きたいと考えるものである。

3. 小 結

羽佐島遺跡における尾根上部分の調査によって、これまでに遺物散布状況の濃淡が確認された。また、本遺跡において少なくとも二箇所の遺物集中箇所が存在することが確認されたことは有意義な成果である。製品を中心とした遺物集中箇所であるB7～B10グリッドとチップ・

フレイクを構成内容とするB20グリッド集中箇所とは、おのおの反映する性格も異なるものであろう。ここで、これら二箇所の集中箇所のそれぞれの内容を述べることは、詳しい遺物の検討作業を経ていないので、問題提起の段階にとどめておきたい。ただ、マクロ的に本遺跡をながめてみると、B2・B21のごとく遺物出土点数が多い調査地点があり、またB7～B10及びB20のごとく遺物の集中単位ともいえる箇所が存在することは、興味をひく現象である。上述してきたことは、ほんの部分的な本遺跡の概要を呈示してきたのであり、今後周辺調査の成果が示されるにつれて、遺跡の全体像が鮮明となるであろう。それについて、上記の集中箇所より詳しい位置付けが可能となるものと思われる。周辺の調査とともに、遺物集中箇所のさらに詳細な検討を通じて、彼ら旧石器時代人の生活様相を捉えてゆきたいと考える。瀬戸内海における、本遺跡の如きの旧石器時代遺跡の究明は端初についたばかりであり、備讃瀬戸における旧石器時代研究の方法論の醸成と相伴って、考えてゆかなければならぬ問題は数多い。先学諸氏の御叱正、御助言を御願いするとともに、我々調査員自身も方法論の確立に努力してゆかねばならぬと考える。

IV 遺 物

調査によって出土した遺物のほとんどは旧石器時代のものであるが、ほかに、石鎌・石匙・弥生土器・土師器・須恵器・瓦器・陶器・輸入磁器・土錐から、近・現代の陶磁器などまである。縄文土器の出土は確認できなかった。しかし、石鎌は少なからず出土しており、その中には縄文時代のものもあると考えられる。弥生土器は非常に少なかった。旧石器時代の遺物をのぞくと、古代末～中世のものがやや多いようである。

ここで紹介するのは、丘陵尾根部と、尾根部に近い斜面から出土した旧石器時代の遺物のうちの一部である。縄文時代以後の遺物は原則として取上げない。しかし、削器などのように、時代比定が困難なものについては縄文時代以後のものが含まれているかもしれない。

旧石器時代の遺物には、ナイフ形石器・削器・斧形石器・石錐（？）・截断面ある石器・舟底形石器・彫器（？）・スポール・尖頭器・翼状剝片・横長剝片・翼状剝片石核・横長剝片石核・円盤状石核・多面体の石核・縦長剝片・縦長剝片石核・細石刃・細石刃核・碎片・叩き石などがある。石器の中ではナイフ形石器が大半を占め、削器・尖頭器・細石刃などがこれにつぐ。翼状剝片・横長剝片・縦長剝片と、それらの石核・叩き石も少くなかった。

以上の遺物はほとんどがサヌカイトを素材としているが、流紋岩と思われるものも少量ある。チャート・黒曜石はごく少量しか出土しなかった。また、叩き石には砂岩と結晶片岩を用いている。

ナイフ形石器（図版21～23・図版40～46）

石器の中で最も多く出土し、形態・技法からいくつかのタイプに分けることができる。図版21は、背面に1面ずつの底面とネガティブな面をもち、断面台形状をなすもので、ほとんどが国府型に属するものと思われる。図版21-1～3は上・下が相称となる典型的な国府型ナイフ形石器である。このタイプのナイフ形石器は、他のタイプのものに比べて一般に大きく、図示したものはいずれも端部を欠くものの、長さ5cm以上を計る。

4・5はネガティブな面が一方の端部に向って広がり、その部分が薄くなりながら広がったまま終る。長さは4.5～5cmである。断面台形のナイフ形石器の中では、このタイプの出土が最も多い。

6は流紋岩と思われる石材を用いている。底面には大きな打瘤が残されているので、これが翼状剝片石核のファースト・フレイクを使用したものであることを知ることができる。腹面には、背面側からの剥離があるが、ナイフ形石器製作時のものかどうかは明らかでない。長さ4.3cm、幅1.6cm。なお、流紋岩製と思われるナイフ形石器はもう1点出土し、翼状剝片石核（図版25-51）も1点出土している。

7は大型のナイフで、長さ8.3cm、幅2.7cm。ネガティブな面に相当する面は自然面のままでなっており、その下端部に小さな剝離面をもつ。刃部の上半部には、使用痕かと思われる小さな剝離がある。打面部の調整は、上半部が背面側から、下半部が腹面側から施されている。

8・9は刃部が直線的で、打面部が湾曲する。10・11は小型品で、現状での長さ2.5～3cmを計る。11は腹面の一部に自然面をもつ。12～14はナイフ形石器の破損品である。完形品の出土より、こうした破損品の出土の方がが多い。

図版22～15・16は背面に複数のネガティブな面をもつナイフ形石器である。ここでは、背面

のネガティブな面が打面側から剝離されたものを図示した。

17～23は断面が三角形をなすナイフ形石器で、国府型ナイフ形石器に比べると不定形・小型のものが多い。17は直線的な刃部に強く湾曲した打面部をもつ。長さ5.7cm、幅1.9cm。

18は基部が広がり、先端部が尖る形態をとるが、先端部の刃部には、腹面側からも調整剝離を施してさらに鋭くしている。刃部の中央部は蝶番剝離をしているので、これをナイフとして用いるのは不適当である。先端部を加工して意識的に尖らせ、断面が部厚い三角形を呈することからすると、これが刺尖の機能をもつ尖頭器として作られたことは容易に想像される。長さ8.4cm、幅1.9cmを計る。

19は湾曲する刃部をもち、上・下がほぼ相称となるものである。20・21は一端が広がり、他端も鋭く尖らない。長さ約3.5cm、幅1.5～2cm。22・23は小型品で、長さ3cm前後、幅1cm前後の大きさである。

24・25は打点に近い基部のみを加工したナイフ形石器である。先端部の打面には細かな打面調整は施されていない。先端部は特に鋭く尖らず、断面三角形となる。長さ4～4.5cm。

26の打面部には腹面側と背面側の両側から加工が施されている。このような技法のナイフ形石器はきわめて少なかった。長さ4.3cm、幅1.5cm。

27～29はいわゆる切出し形のナイフ形石器である。二次加工は打面側ばかりでなく、刃部側の大部分にまで及び、刃部は先端部の片側にわずかに残されている。大きさは一定せず、図示したものでは長さ4～6.6cm、幅1.6～3.4cmを計る。27の下端部・28の背面に自然面が残され、28の打面部下端には二次加工以前の打面が残されている。

図版23～30～34は、打面部を二次加工し、その反対側を刃部とするものの、背面には不定方向からの剝離面をもったり、不定形であったりするナイフ形石器である。

35は、主要剝離面を形成した打点の部分のみ、腹面側から二次加工されている。36・37のように、二次加工に先立つ打面及び打点を残すナイフ形石器も少くない。

38の打面部は、下半部のみ腹面側から二次加工が施されているが、上半部は背面側からの剝離である。39の打面部には背面側から二次加工を施して、主要剝離面形成時の打面・打点を除去している。形態的には国府型ナイフ形石器に類似するが、打面部の二次加工は反対側からとなっている。38は長さ3.4cm、幅1.4cm。39は長さ4.5cm、幅2.2cm。

40・41は縦長剝片を利用したナイフ形石器である。40は基部に近い両側縁に、腹面側から二次加工を施す。長さ4.6cm、幅2.2cm。41は基部を欠失する。一方の側縁部に、腹面側から二次加工を施す。二次加工面をのぞく背面は自然面からなる。長さ2.3cm、幅1.5cm。

削器（図版24～42、43・図版47）

削器には扁平な剝片の側縁を加工したものと、任意の剝片を利用したものとがある。図版24～42は横 striker 利用の扁平な剝片を利用し、全周にわたって丁寧な調整剝離を施している。調整剝離は背面側と腹面側の両方から行っているが、その施された範囲が異なるため、同一部分においては両面からは行われていない。長さ7.3cm、最大幅3.3cmの短冊形をなす。43は自然面をもつやや分厚い不定形の剝片を用い、その一辺に加工を施している。長さ5cm、最大幅2.8cm。

斧形石器（図版24～44・図版48）

44は翼状剝片石核を再利用したもので、削器とすべきかもしれない。短側縁には両面から丁寧な調整剝離を施すが、長側縁の一方には片面しか行っていない。調整剝離には細かな階段状

剥離が顕著に認められる。長さ11cm、最大幅5.3cmの小判形をなす。なお、再利用する以前に剥ぎとられた翼状剝片は、長さ約6.6cm、幅約3.8cmで、翼状剝片の長さは石核の幅の2/3以下である。

石錐（図版24—45・図版49）

長さ3.5cm、最大幅3.1cm。錐部の二次加工は片面のみに施され、断面台形状となる。あるいは、内湾する刃部をもった削器とすべきかもしれない。

截断面ある石器（図版24—46・図版49）

長さ3cm、幅1.5cm、厚さ1cmの方柱状を呈し、両端には両側から調整剝離を施す。側面は、両端から加撃・切断している。

舟底形石器（図版24—47～49・図版49）

47はやや大きく、両端部は欠失している。最大幅2.1cmを計る。横長剝片を利用し、背面の調整剝離は大きくて粗い。48は両端が鋭く尖るが、49は丸みをもつ。いずれも横長剝片を用い背面には丁寧な加工を施している。48は長さ2.5cm、最大幅1.3cm、厚さ0.8cm。49は長さ3.3cm、最大幅1cm、厚さ1cmを計る。

尖頭器（図版26—55～58・図版50）

尖頭器は、長さ3cm前後のものから20cm前後のものまで出土している。しかし、基部が広がり、舌状の突起をもつ有舌尖頭器は確認できなかった。図版26—55～57は小さな横長剝片を利用したもので、長さ2.9～4.2cmを計る。先端が尖らず、基部が広くなるもの（55）と、先端が鋭く尖り、木葉形を呈するもの（56・57）とがある。56は背面の両側縁に、腹面側から加工するが、55は腹面の一部にも加工が及んでいる。57は両側縁の両面を加工している。58は大型の木葉形尖頭器で、下半部を欠失する。現存長9.9cm、最大幅5.9cmであるが、復元すると長さ20cm前後になるものと思われる。両面に丁寧な加工を施しているが、右図には調整剝離以前と思われる縦方向の剝離面が認められる。

横長剝片石核（図版25・図版51・52）

翼状剝片石核もここに含める。図版25—50・51は典型的な翼状剝片石核で、石核の幅とほぼ等しい長さの翼状剝片を連続して剥ぎとっている。50は流紋岩と思われる石材を用いており、他に例をみない。同じく流紋岩製と思われるナイフ形石器は2点出土しているが、図版21—6は、この石核のファースト・フレイクを用いたものかもしれない。50は長さ3.1cm、幅7.4cmで、長さ6.6cm、幅2.1cmの翼状剝片をとっている。51は4.5×7.7cmで、長さ7.3cm、幅2.6cmの翼状剝片をとる。

52は並列して翼状剝片をとっているため、得られた翼状剝片は小さくなり、上面の調整剝離の大きさとの差は、50、51ほど大きくない。石核は一端を欠失するが、長さ3.1cm、幅7.6cmである。下面の剝離痕の幅は3～4cm。

53は打面調整をもたず、一方の側縁の両面から横長剝片をとっている。長さ3.4cm、幅7.8cm。長さ3～4cmの剝片がとられている。

54は板状のサスカイトを用い、両面にわたって不定方向から横長剝片を剥いでいる。4.5×4.1cm。長さ3cmをやや越える程度の剝片がとられている。

翼状剝片（図版26—59～62・27—63～66・図版53・54）

図版26—59～61は典型的な翼状剝片で、1面ずつのポジティブな面・ネガティブな面・底面

と打面部からなる。打面部にはネガティブな面の側から調整剝離を施す。59は下部を欠失するが、長さ 7.1 cm、幅 3.5 cm を計る。61は小型で、長さ 3.6 cm、幅 1.2 cm である。60は上半部を欠失し、下端部には自然面が残されている。

62は背面に 2 つのネガティブな面をもつ。

図版 27—63・64 はネガティブな面の側から調整剝離を施された打面部をもつが、背面側に底面がないため、断面は三角形となる。このような剝片は翼状剝片を得るために加熱したが、力が底面にまで達しなかった結果生じたとも思われるが、ネガティブな面が上・下に重なり、背面に 2 本の稜をもつ翼状剝片・ナイフ形石器はあまりなかったようである。

65・66 は翼状剝片とも思われるが、打面部は打点の片方にしか認められない。このような剝片の多くは、典型的な翼状剝片からとられたものではなく、図版 25—52～54 などのような石核から得られたものであろう。

横長剝片（図版 27—67～75・図版 55）

ナイフ形石器に加工することのできる横長剝片を図示した。図示した横長剝片は、いずれも平坦で小さな打面をもち、腹面は 1 面のポジティブな剝離面からなるが、背面はいくつかのネガティブな剝離面をもつものが多い。これらの多くは図版 25—53・54 などの横長剝片石核から得られたものであろう。これらの横長剝片がナイフ形石器を作成する意図のもとに生産されたかどうかは明らかにしがたいが、加工の程度によってはこれらから、断面三角形のナイフ形石器や、背面に複数のネガティブな面をもつナイフ形石器・ネガティブな面が一方の端部に向って広がる「国府型」ナイフ形石器・小型のナイフ形石器などを作ることは可能であると思われる。

円盤状石核（図版 28—76・図版 49）

6.1 × 6.7 cm、厚さ 2.5 cm。一端に自然面を残すほかは、まわりから剝離を行って剝片をとっている。剝離痕の大きさは一定せず、幅 2 ～ 4 cm 程度である。

縦長剝片（図版 28—77～82・図版 56）

大きさは一定せず、図示したものでは長さ 2.8 cm、幅 0.9 cm から、長さ 6.9 cm、幅 1.6 cm までを計る。78・80以外は表面の風化が著しい。縦長剝片は一般に、幅に比べてかなり長い。しかも、断面が高い三角形ないし長方形・台形をなすものも多いため、四角柱や三角柱状のものが少くない。

縦長剝片石核（図版 28—83～85・図版 57）

いずれも扁平な板状のサヌカイトの剝片を用い、小口面を打面として一端または両端から、打点を連続的に後退させて、連続して縦長剝片をとっている。縦長剝片は、石核がそれほど厚くないために、剝離面が並列しても 2 個程度となるものが多い。したがって、縦長剝片石核となったサヌカイト板の厚さが縦長剝片の幅となり、方柱状の縦長剝片が剥ぎとられる場合も多い。

83 は長さ 3.4 cm、幅 1.2 cm、厚さ 2.2 cm で、長さ 3.4 cm、幅 1.9 cm の剝片がとられている。84 は 6 × 3.7 × 1.4 cm で、6 × 1.4 cm の剝片がとられている。縦長剝片は一端から連続して剥取され、打面調整は行われていない。85 は 6 × 2.6 × 1.5 cm の大きさで、両端から縦長剝片を生産している。一方の打点側には打面調整が施され、新旧 2 面の剝離痕が残されている。最後に剥がれた縦長剝片は長さ 5.7 cm、幅 1.3 cm の大きさである。古い打点は、打面の角に残されているので、断面三角形の縦長剝片がとられたものと思われる。

細石刃（図版29—86～92・図版56）

細石刃と細石刃核にはそれぞれ2種類のサヌカイトが使用され、両者を対比することが可能である。図版29—86～88は、ナイフ形石器などに用いるサヌカイトよりさらに緻密な質のサヌカイトを用いている。⁽¹⁾ 89・90はナイフ形石器などと同質のサヌカイトである。

図示した細石刃は幅0.4～0.6cm、長さは現状で1～1.6cmを計る。91・92はやや大きいが、現在のところ、これに対応する細石刃核は見当らない。縦長剝片とすべきかもしれない。92は長さ3cm、幅0.9cm。91・92ともナイフ形石器などと同質のサヌカイトである。

細石刃核（図版29—93～97・図版58）

93・94はナイフ形石器などと同質のサヌカイトを用いる。93は特に表面の風化が顕著で、縦長剝片や同石核と類似する。95～97はより緻密なサヌカイトを用いている。

93は三角形状の扁平な板状サヌカイトの一端から、連続して細石刃をとっている。打面には打面調整を施している。細石刃の剥取面には、下端からの剥離痕も認められる。このことをのぞくと、この細石刃核は縦長剝片石核（図版28—83～85）との類似が大きく、縦長剝片石核を小型化したものともいえる。長さ1.8cm、幅2.8cm、厚さ0.8cm。剥ぎとられた細石刃は長さ1.9cm、幅0.4cm程度である。93も同じタイプの細石刃核である。長さ2.4cm、幅1.2cm。93・94とも、2つの細石刃を並列して剥いでいる。

95は、93・94にみられない側面の調整を行っている。しかし、両面とも自然面が残されているので、板状の原石を利用しているのであろう。打面には横方向から調整剝離を行っているが、打点付近ではさらに打点側から調整を加える。細石刃の剥離は一端のみである。下面は横方向からの一撃によって剥離している。1.6×2.8cm、厚さ1.5cm。

96は三角形板状サヌカイトの一辺を打面とするが、細石刃の剥離は両端で行っている。打面には95と同様、横方向から大きく調整剝離を施したあと、打点（先端）方向からの細かな調整を加えている。長さ2.7cm、幅3.2cm、厚さ1.6～0.6cm。長さ3cm、幅0.3cm前後の細石刃をとっている。

97は細石刃核の素材である。片方の側面は自然面であるが、反対側の側面には細かな調整を加えている。打面には横方向からの調整を施す。1.9×3.7cm、厚さ2.1cm。

叩き石（図版30—98、99・図版59）

98は長さ10.3cm、最大幅3.2cmの棒状の砂岩である。端部には剥離痕はみられない。99は変成岩であるが、一部に変成せず砂岩そのまま部分がある。長さ7.6cm、最大幅1.5cm。両端の両面に剥離痕があり、片面の剥離痕は特に顕著である。

叩き石は砂岩を用いるものが多いが、結晶片岩なども使用されている。

（註）

1. 山本哲也の実見によれば、鷲羽山遺跡の細石刃・細石刃核もこれと同質である。

なお、羽佐島出土遺物については、東北大学大学院柳田俊雄・同志社大学松藤和人・岡山大学小野昭・春成秀爾の各氏に種々の御教示をたまわった。記して感謝したい。

実測図掲載遺物出土地点一覧表

実測図番号	出土グリッド	遺物番号	実測図番号	出土グリッド	遺物番号
1	表 採		51	B 12	337
2	B 6	745	52	B 7	629
3	B 6	172	53	A 26—1	113
4	A 36—1	484	54	B 2	604
5	A 38—1	52	55	B 1	85
6	B 9	376	56	A 36—1	15
7	B 12	726	57	B 4	488
8	B 6	101	58	B 20	es区
9	B 6	391	59	A 36—1	812
10	B 1	249	60	B 1	196
11	B 21	144	61	B 17	d n区
12	B 1	337	62	A 36—1	1,010
13	B 1	529	63	B 12	1,673
14	B 1	502	64	B 5	493
15	B 6	681	65	B 5	451
16	A 36—1	1,196	66	A 36—1	546
17	B 20	228	67	B 8	446
18	A 36—3	506	68	B 10	464
19	B 24	206	69	B 18	815
20	B 6	20	70	B 21	210
21	B 6	409	71	A 36—3	479
22	B 11	407	72	A 36—2	29
23	B 4	614	73	B 18	618
24	B 9	206	74	B 21	1,983
25	B 15	359	75	B 7	1,166
26	A 36—1	500	76	B 1	454
27	B 9	613	77	B 1	43
28	B 7	1,015	78	B 6	571
29	B 6	522	79	B 1	527
30	B 21	973	80	B 6	156
31	B 9	885	81	B 13	636
32	B 21	733	82	B 13	817
33	B 7	332	83	B 6	322
34	B 10	118	84	B 12	336
35	B 6	150	85	A 36—3	452
36	B 8	546	86	B 21	2,108
37	A 26—1	59	87	B 4	415
38	B 17	419	88	B 16	333
39	A 36—1	1,060	89	B 16	594
40	B 5	569	90	B 21	748
41	B 20	614	91	B 21	1,149
42	B 11	494	92	B 8	533
43	B 23	123	93	B 8	732
44	B 8	108	94	B 16	22
45	B 9	119	95	B 1	406
46	B 21	543	96	B 21	278
47	B 1	381	97	B 1	6
48	B 12	744	98	B 1	518
49	B 2	1,171	99	B 9	434
50	B 7	797			

V おわりに

1978年7月17日から始まった羽佐島遺跡の調査によって出土した旧石器時代遺物は、1979年3月末までに数万点にたっしている。そのうち石器だけでも数千点は出土しているものと思われるこのように多数の遺物が出土した結果、特に遺物の整理作業は遅滞し、出土遺物の全体を把握しえないでいるのが実情である。

概報製作までに水洗を終え、目を通すことできた遺物は出土点数の1/3程度にとどまり、そのなかで、ここに図示できたものはきわめてわずかにしかすぎない。また、遺物出土状態の検討も、結論を下すところまで進んでいないため、今後の調査や整理の状況、あるいは検討などによって、これまで述べてきた内容に変更が生じるかもしれない。

今回の発掘調査によって、旧石器時代の明確な遺構は検出されなかったが、B7～B10・B20グリッドで遺物集中箇所が検出されたことは注目される。

羽佐島における旧石器時代遺物は、花崗岩からなる丘陵の尾根筋を中心にして立地しているため、遺物包含層がきわめて薄く、しかも後世の人の為的擾乱や木の根の働きなどによる自然的擾乱などのために、発掘調査によって各時期の文化層を検出することは不可能である。しかし、面的な調査を行った結果、第3層及び第4層には遺物が集中して存在する箇所があることが明らかとなった。しかも、第3層と第4層の遺物集中箇所は重なるので、両者は同一のものと考えることができる。これらの集中箇所から出土した遺物の分析は進んでいないが、B20グリッド東端の集中箇所からはほとんど小さな剥片・碎片のみが出土しているので、何らかの意味をもった単位である。しかし、こうした遺物集中箇所は良好な包含層中から検出されたものではないので、ただちに「ユニット」とか、「ブロック」とかの名称で呼ぶのは適当でない。ただ、全般的に土器の出土が少ない第3層・第4層から、場合によってはサヌカイト片だけが集中して出土したことは事実として、今後とも検討を加える必要があろう。また、より小規模な旧石器時代遺物の集中は上記の2例の他にも確認されているが⁽³⁾、いずれにせよ、今後の調査においても包含層の下部から遺物集中箇所が検出されることが予想されるので、その評価は今後の課題としたい。

つぎに遺物について2、3の問題を述べておきたい。

前述したように、旧石器時代の遺物はいくつかの時期のものを含むが、層位的に出土したものではないので、出土状態から編年的な位置づけや共伴関係を知ることはできない。しかし、出土した石器をみると、背面側から二次加工したナイフ形石器（図版23-39）などのように、これまで知られていなかったものもいくつかはあるが、これらを含めて、ほとんどのものは国府文化期から細石刃および尖頭器の時期のものと考えられ、同時期の周辺の遺跡における石器組成と大きく異なるものではないようである。

ところで、国府文化期に先行するものとされているものに縦長剥片とその石核がある。⁽⁴⁾ 縦長剥片は、板状のサヌカイトを石核とし、その小口面を打面として一端または両端から、打点を後退させて連続的に縦長剥片をとる特徴的なものである。同様な石核は与島西方遺跡⁽⁵⁾・櫛石島⁽⁶⁾からも出土しているので、中部瀬戸内に特徴的な技法である可能性が強い。

羽佐島遺跡出土のこの種の縦長剥片・縦長剥片石核をみると、鷺羽山遺跡で注意されたよう

に⁽⁷⁾ほとんどが風化が顕著で、出土した石器の中では最も風化しているといってよい。⁽⁸⁾しかし、羽佐島遺跡ではB11グリッドの最下層で縦長剝片と縦長剝片石核がやや多かったものの、その他のグリッドでは最下層から国府型ナイフ形石器が出土した例などもあり、縦長剝片とその石核が多く出土する事実は認められなかった。

一方、細石刃核に、上述した縦長剝片石核と技法、石材などが類似するものがあることは注目される。現在の編年観からすれば、両者の間には長期の断絶を認めなければならないので、細石刃の生産技法の自生は考えられないが、この種の細石刃核が縦長剝片と同じく他地域に見られないものであるだけに、その成立に关心がもたれる。

ナイフ形石器を製作するための翼状剝片や横長剝片をとる石核には、いくつかのタイプが出土した。典型的な翼状剝片石核（図版25-50・51）から、打面調整の剝離が大きくなったり、翼状剝片が並列して剝がれるもの（図版25-52）、打面調整の剝離など、下面の剝離の区別がなくなり、両面から横長剝片をとるもの（図版25-53）、板状のサヌカイトの不定方向から両面にわたって横長剝片をとるもの（図版25-54）まで、連続した技法の変化としてとらえることも可能であるかもしれない。しかし、こうした石核からは、打面部以外が類似した横長剝片が生産される場合も多い。しかも、打面部は二次加工で除去するために、二次加工の程度によってはいくつかのタイプのナイフ形石器が製作されることは、横長剝片（図版27-67～75）の場合でみたとおりである。このことは、製品によるナイフ形石器の分類が、必ずしも製作技法にまで反映しない場合もありうることを示し、ナイフ形石器の分類とその評価の難しさを物語っているのであろう。

ところで、羽佐島遺跡から出土するサヌカイト片では、長さ・幅とも15cm前後、厚さ2cm前後のものが最大級である。この程度のサヌカイトであれば各種の石核をつくることができるのでは、石材産出地から石器素材としてサヌカイトを持ち帰る場合には、この程度の大きさに割って持ち込んだ可能性が強いものと思われる。

遺物についてはほかに記すべき点も多いが、現在は整理作業をほとんど行っていない段階なので、詳細は今後の検討に待ちたい。

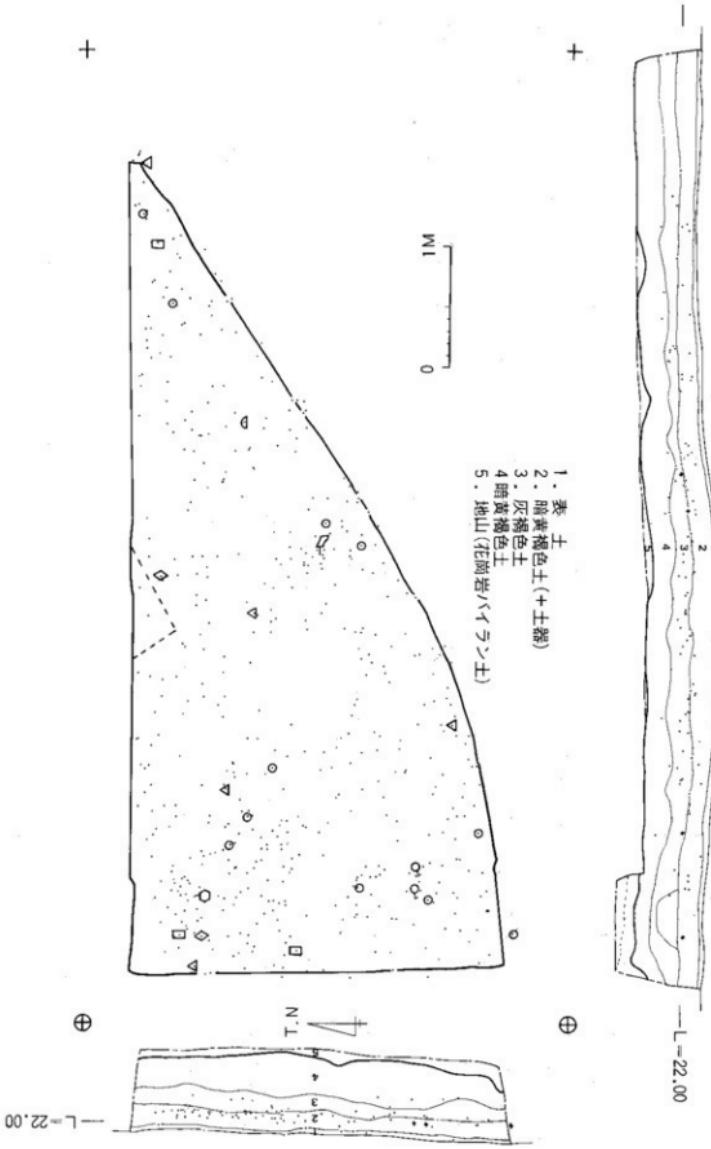
（註）

1. 例えば、ブロックそのままではないにせよ、後世の破壊を受けた名残りの一部かもしれない。
2. 第3層、第4層の土器がどのような理由で包含されたのかは明らかにしがたいが、後世の大きな搅乱を考えなくても、地表面から包含層の下底までが浅いため、例えば木の根の作用などによって少量の土器片が沈下することも、絶対にありえないことではないと思われる。
3. 掲図第6図参照。
4. 鎌木義昌「岡山県鷺羽山遺跡調査略報」『石器時代』3 1956
5. 昭和52年12月より香川県教育委員会が調査。報告書近刊。
6. 松本敏三「櫛石島・第Ⅱ一北調査区」『瀬戸大橋建設に伴う埋蔵文化財予備調査報告』(1) 1977
7. 註4に同じ。
8. 少数ながら風化の著しくない縦長剝片石核もあった。一方、細石刃核（図版29-93）や石錐にも顕著な風化を示すものもあるので、風化の度合いからだけでは、時期を推定する目安にはなりえない。
9. 鎌木義昌・高橋謙「瀬戸内海地方の先土器時代」『日本の考古学』(1) 1965
10. 瀬戸内海地方のナイフ形石器を中心とした従来の分類と編年観については、柳田俊雄「瀬戸内東部及び近畿地方における旧石器時代研究の現状とその問題点—特に研究過程における方法論をめぐって—」『プレリュード』20 1977などの批判がある。

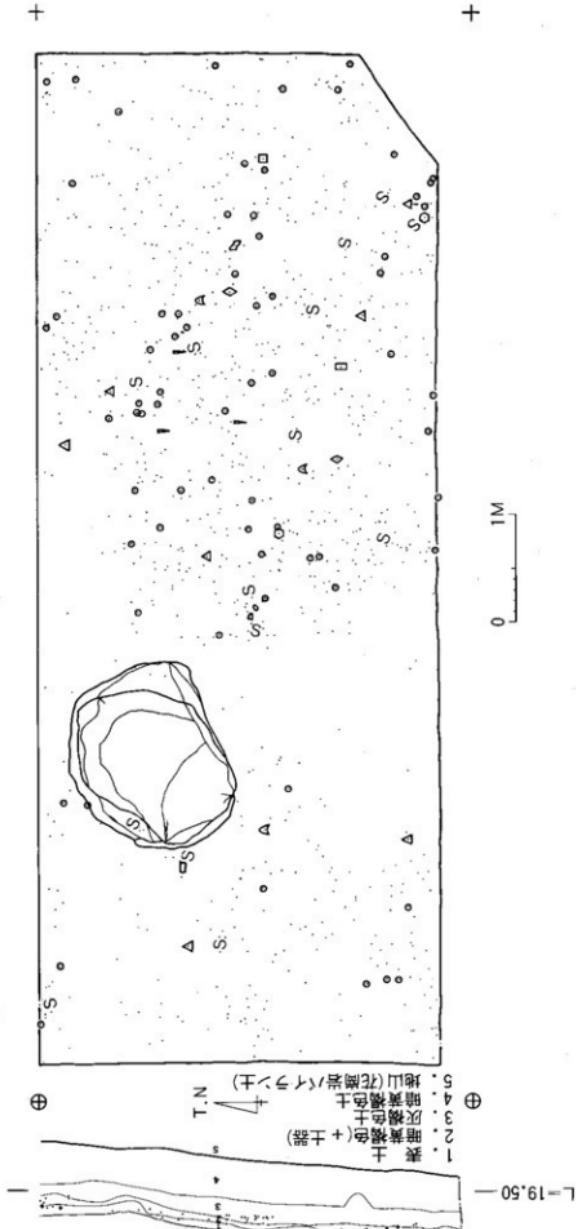
図版

遺物記号表

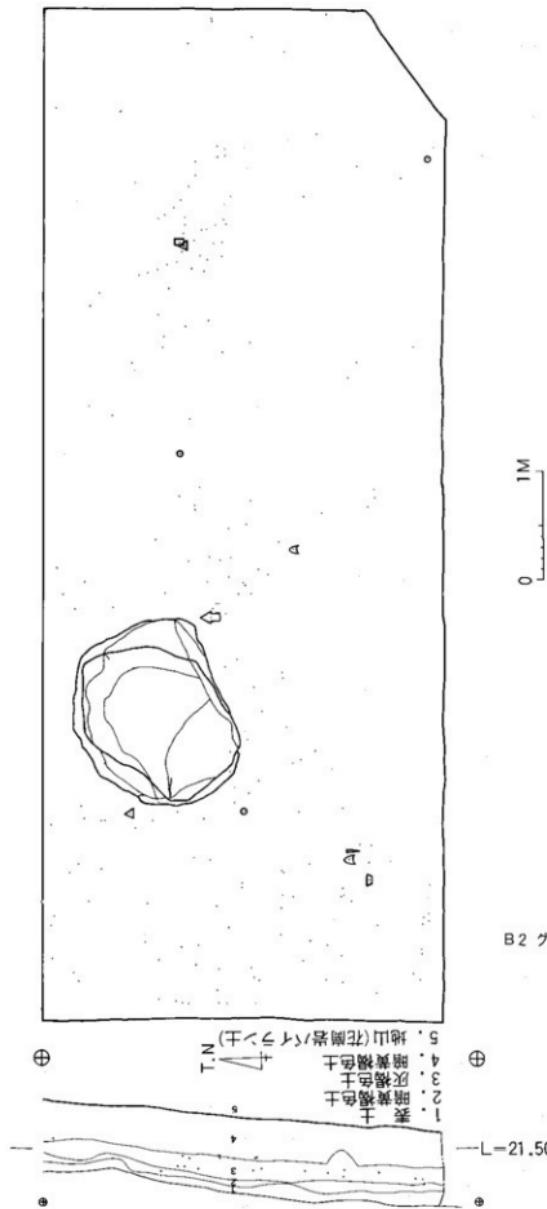
- 土器
- △ ナイフ
- スクレイバー
- 翼状剥片
- 調整痕ある剥片
- ◇ 横長剥片石核
- 縦長剥片
- ▲ 石鐵
- 叩き石
- 縦長剥片石核
- マイクロコア
- ▽ マイクロブレイド
- ↑ ポイント
- R 流紋岩
- (S サヌカイト)



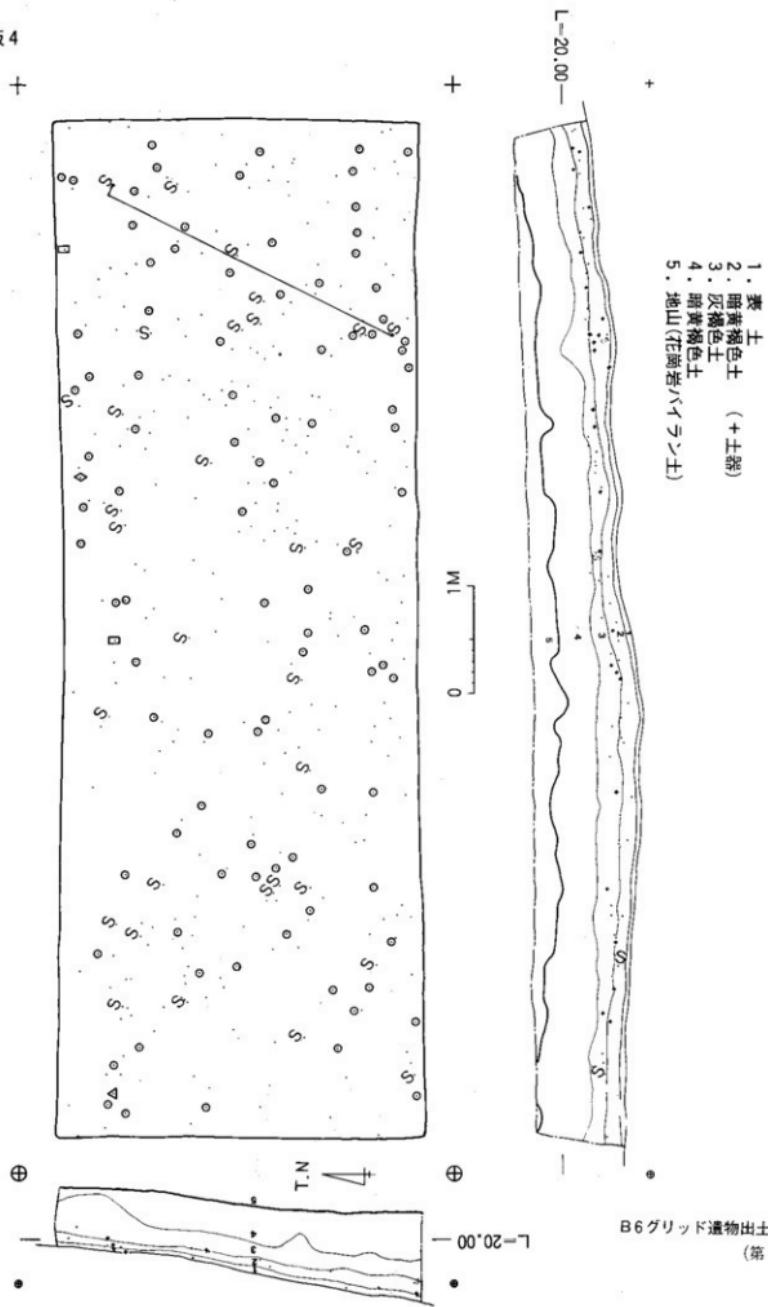
B1グリッド遺物出土状態（第1面～終了）

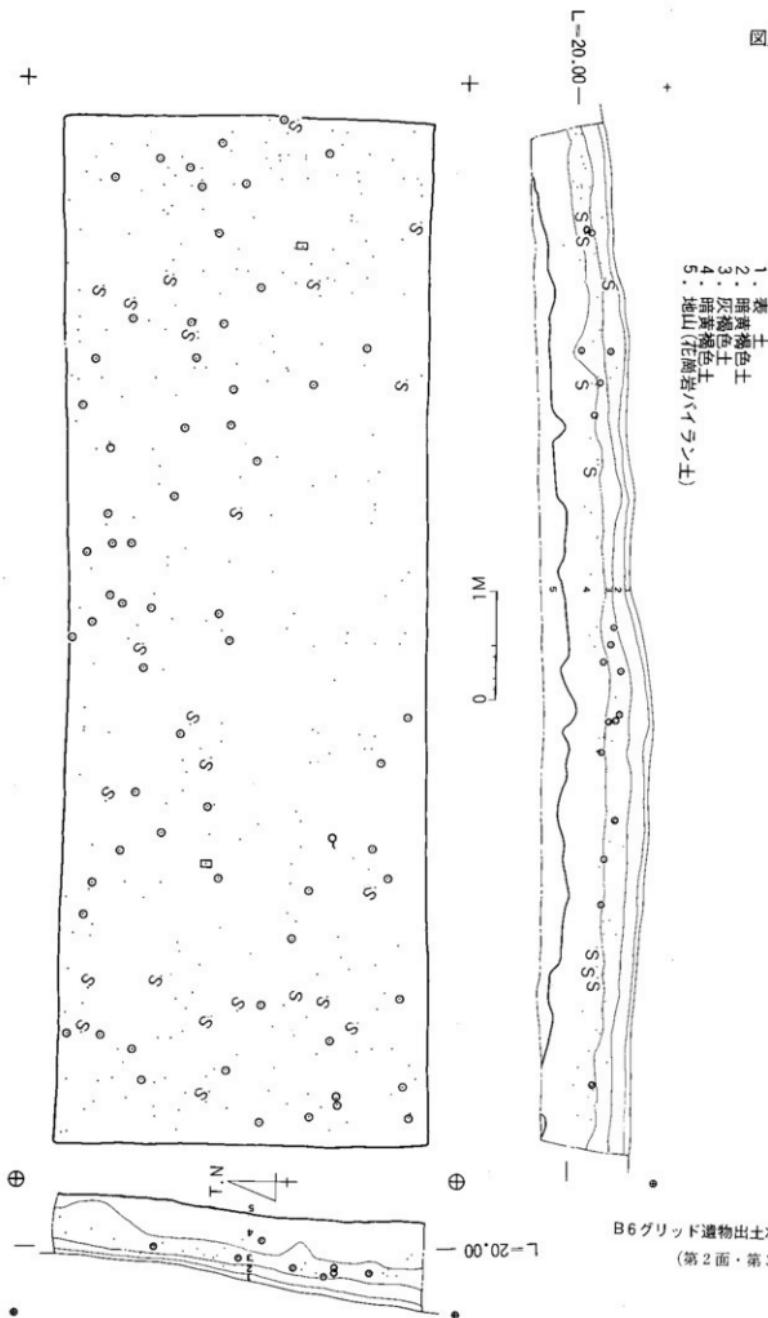


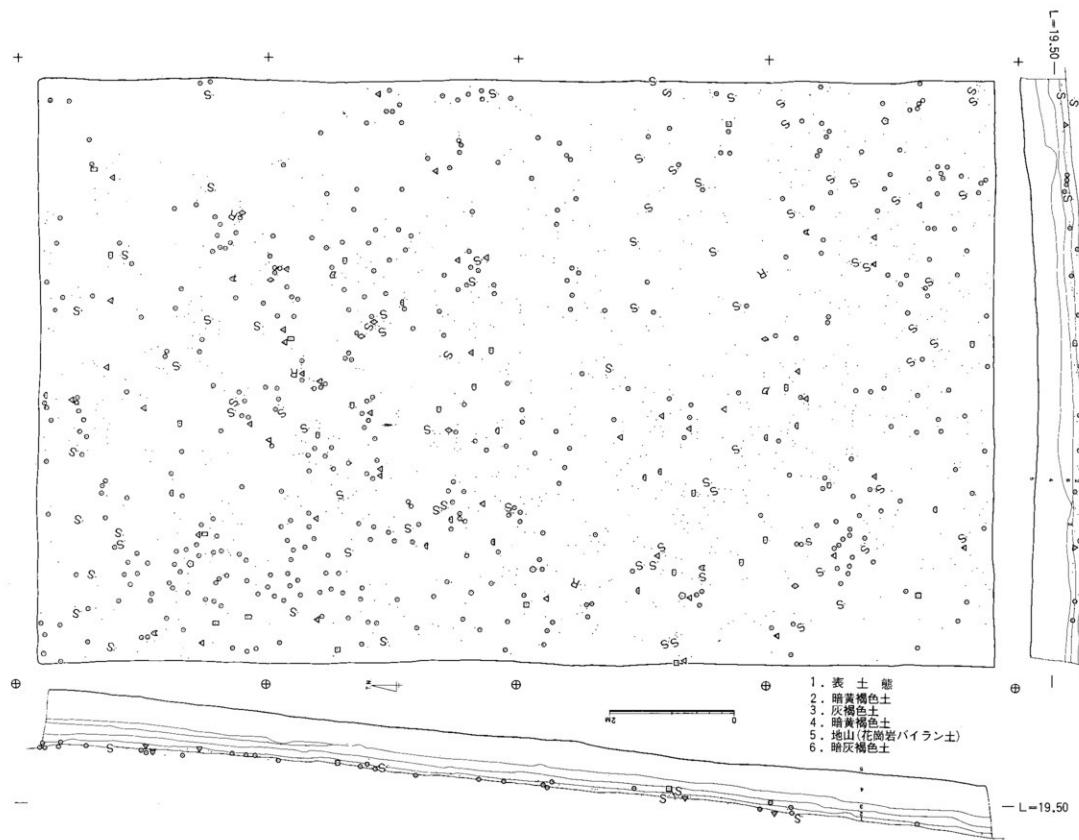
B2 グリッド遺物出土状態（第1面～第3面）



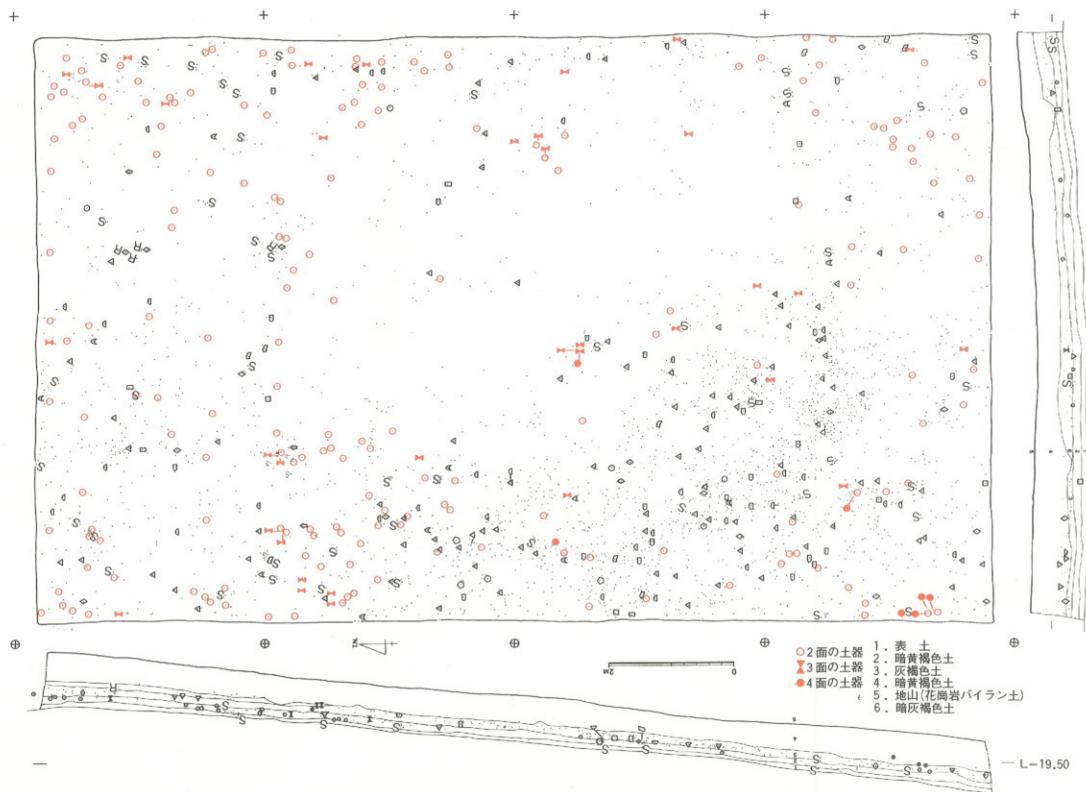
図版4



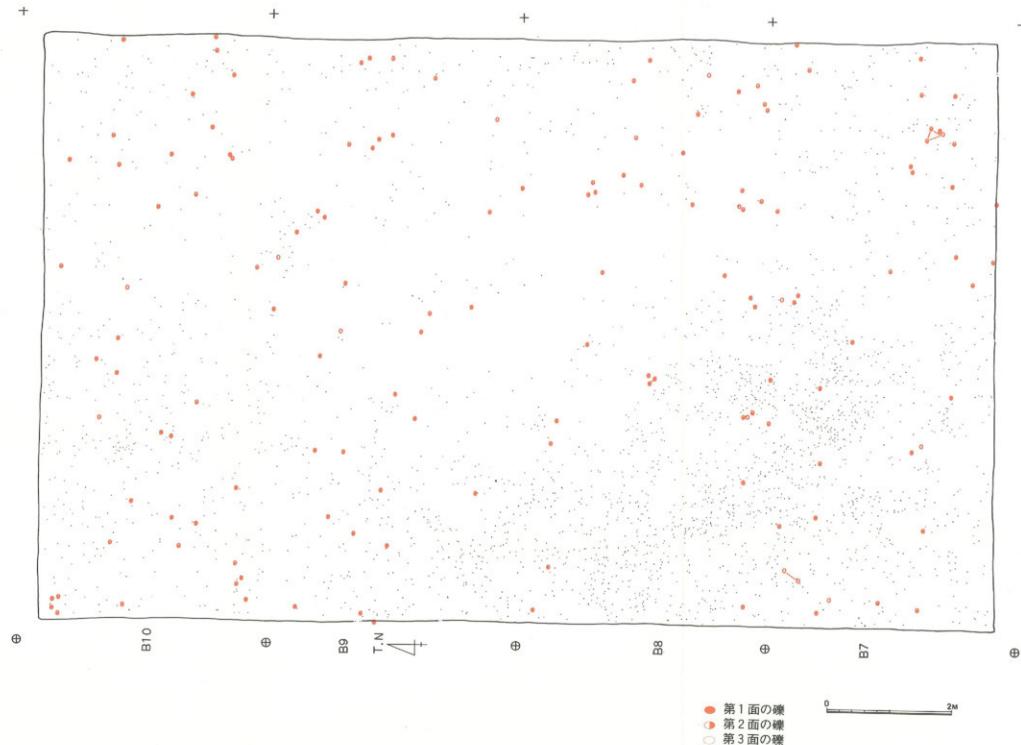




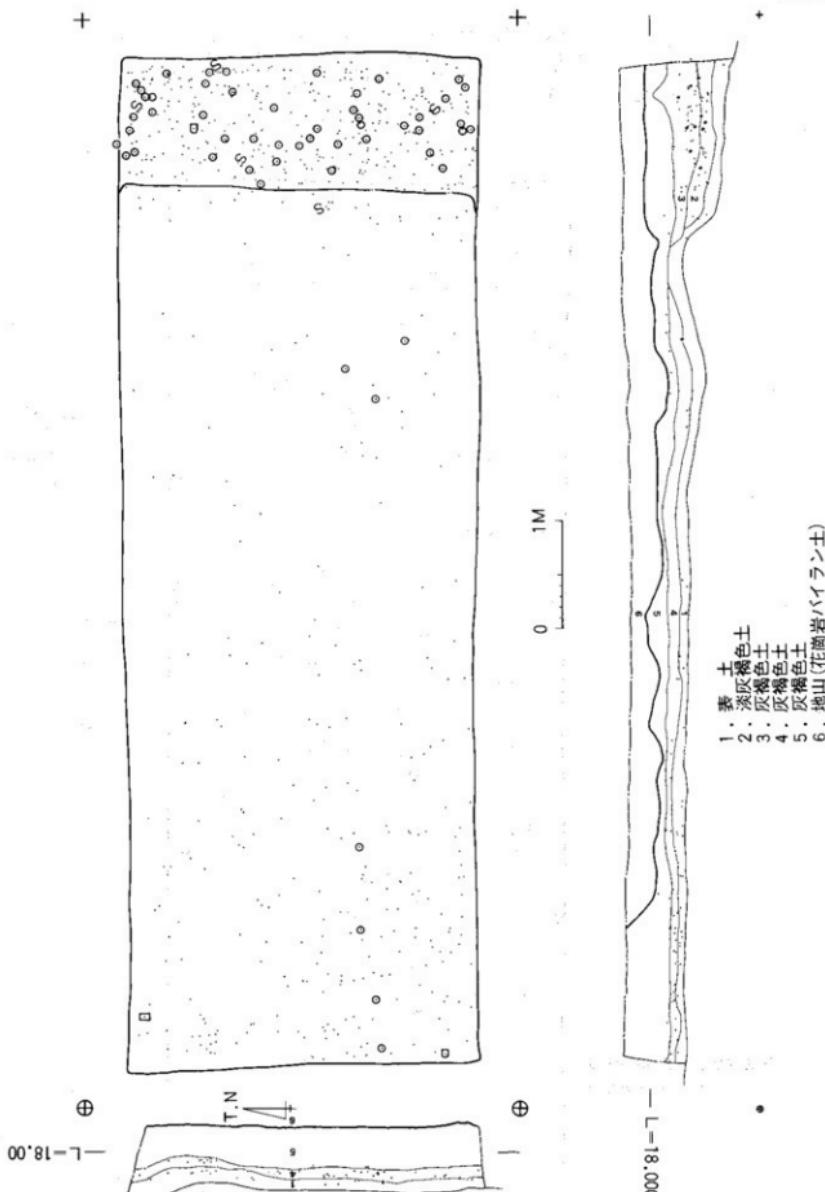
B7~B10 グリッド遺物出土状態（第1面）



B7～B10 グリッド遺物出土状態(第2面～第5面)

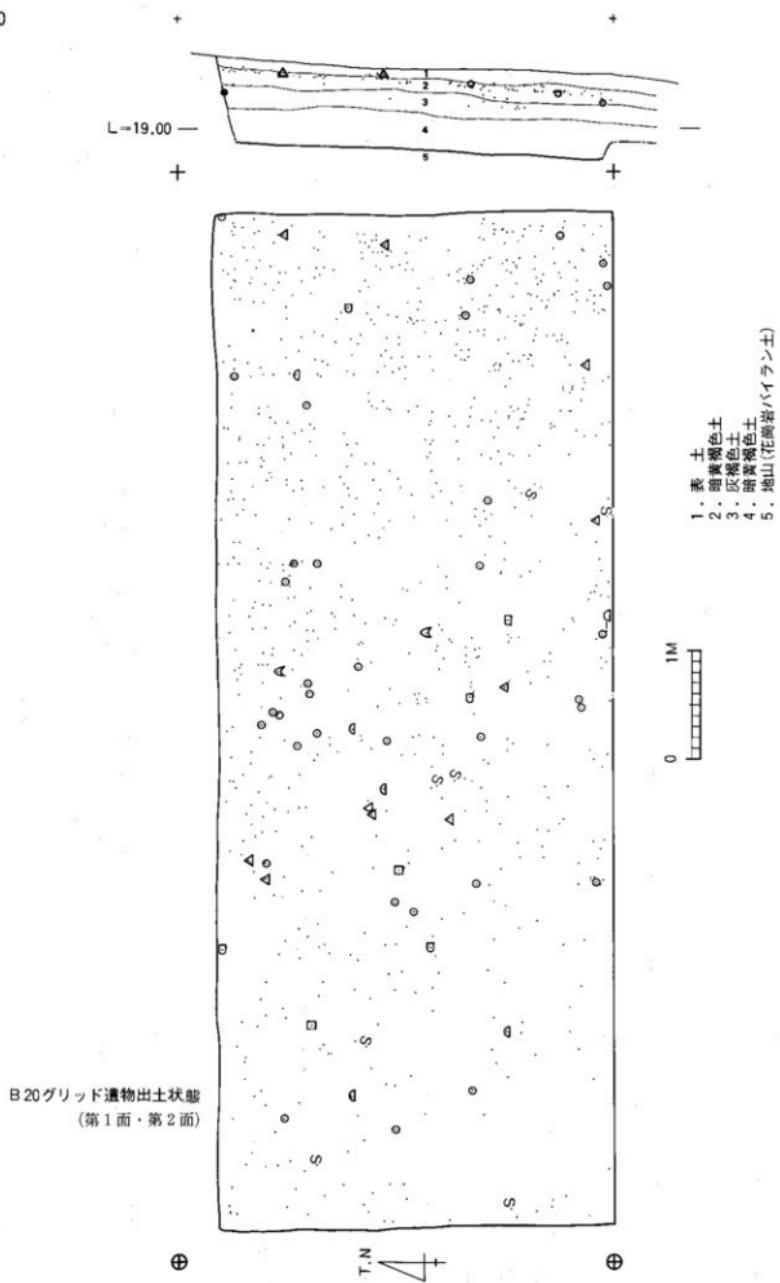


B7～B10グリッド遺物及び礫出土状態（第1面～第5面）

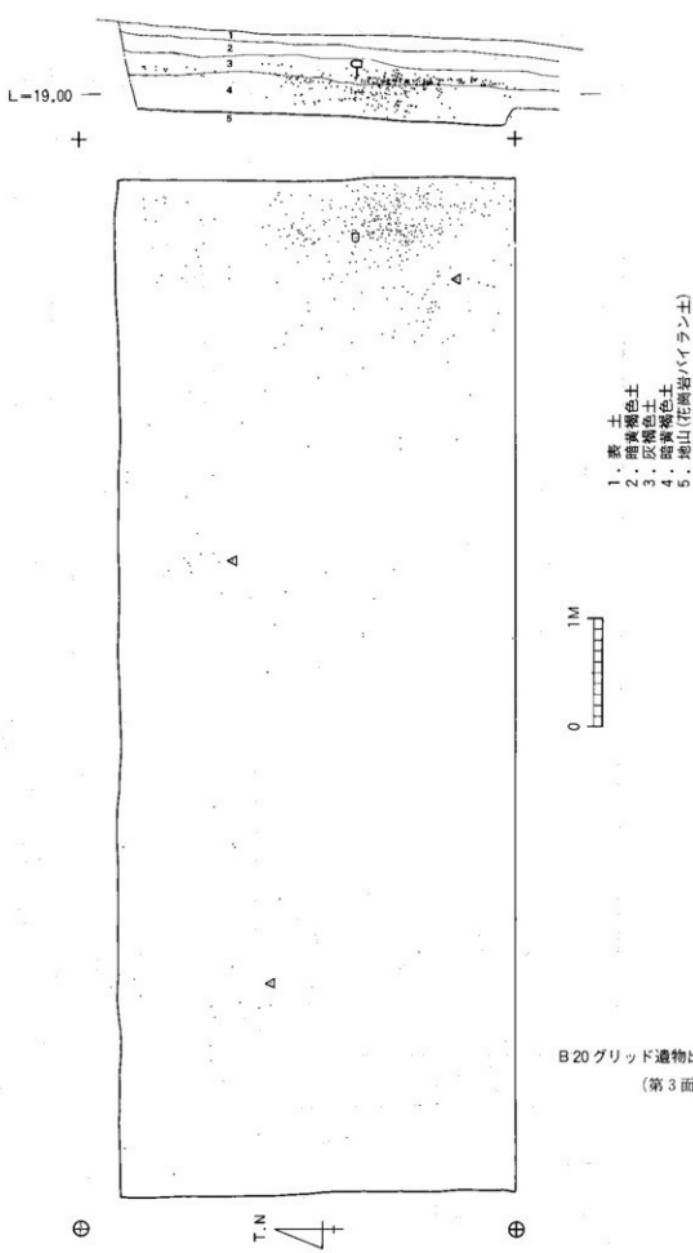


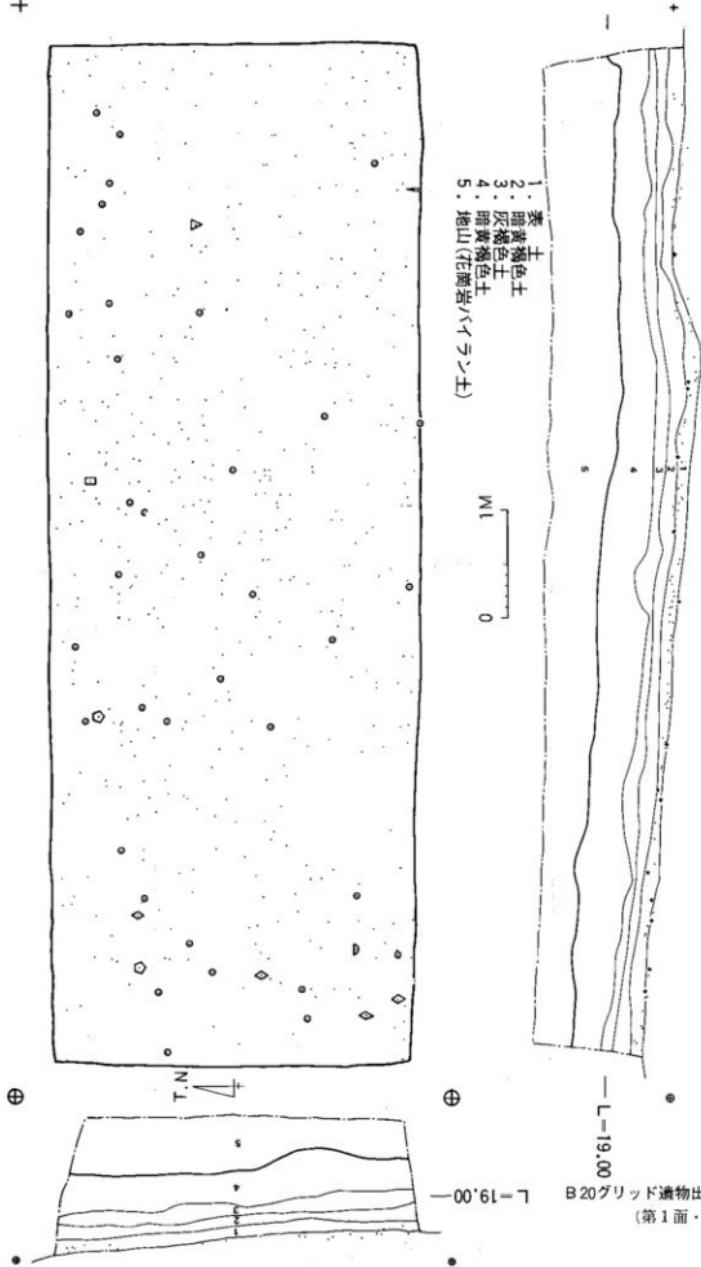
B16 グリッド遺物出土状態（第1面～第6面）

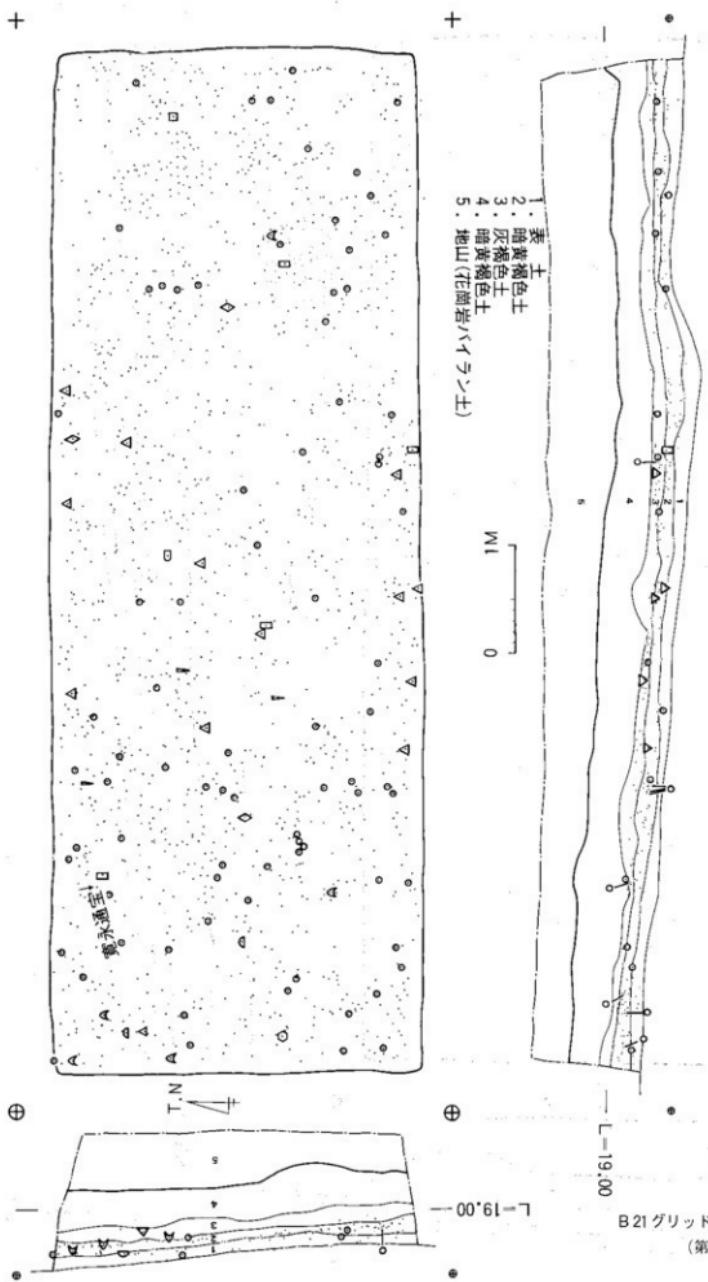
図版10



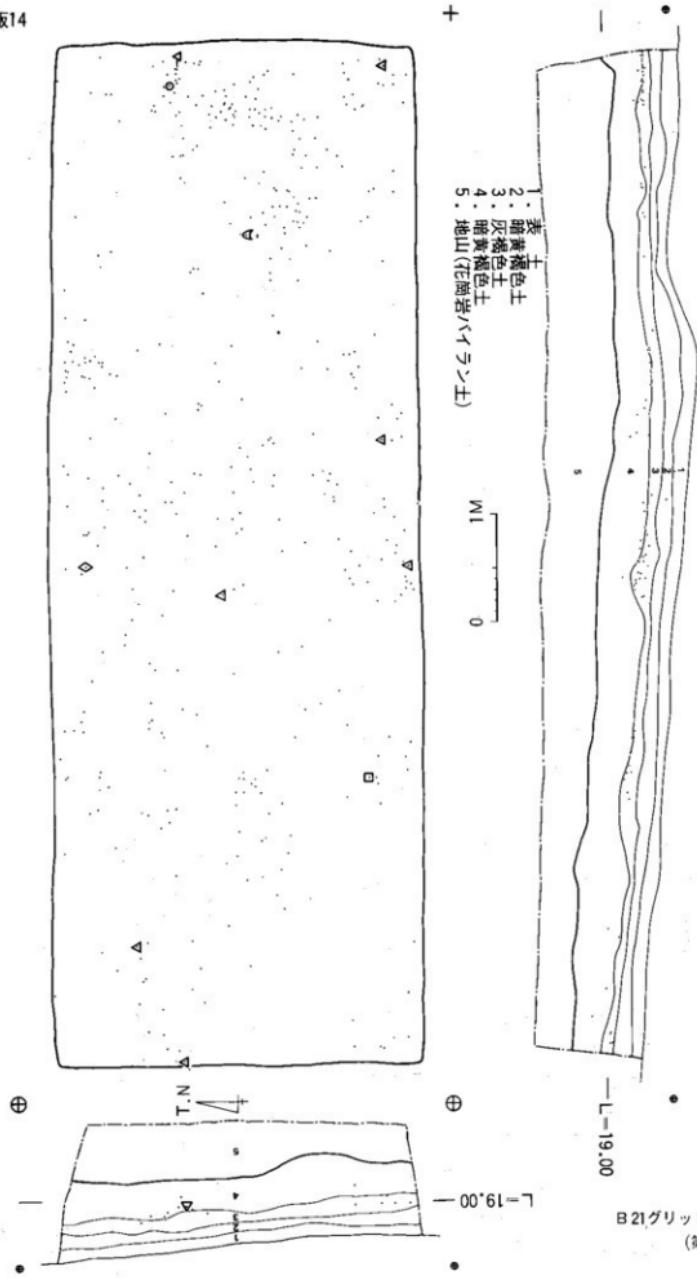
図版11





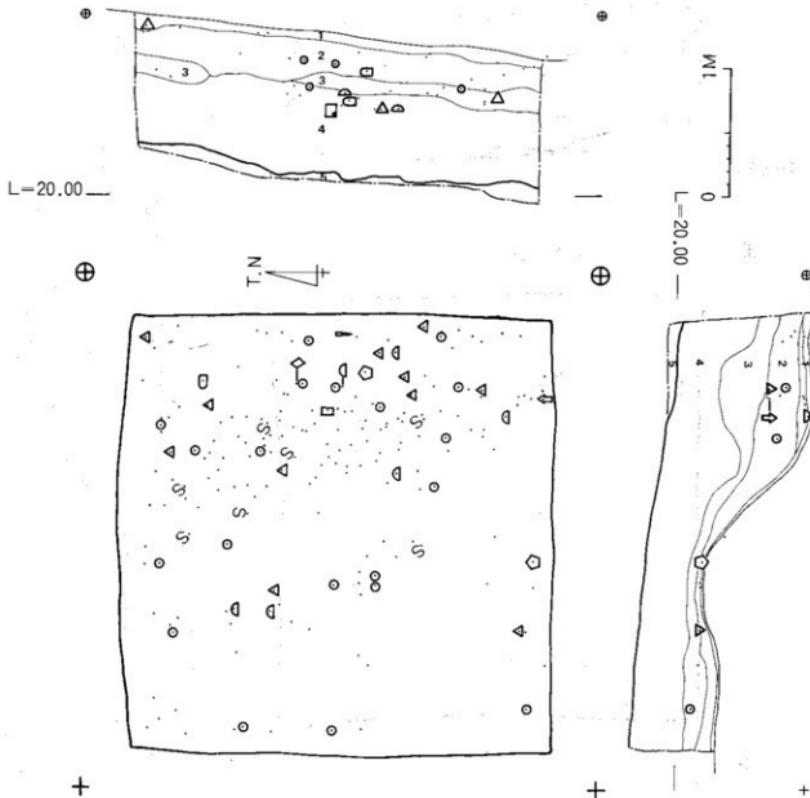


図版14



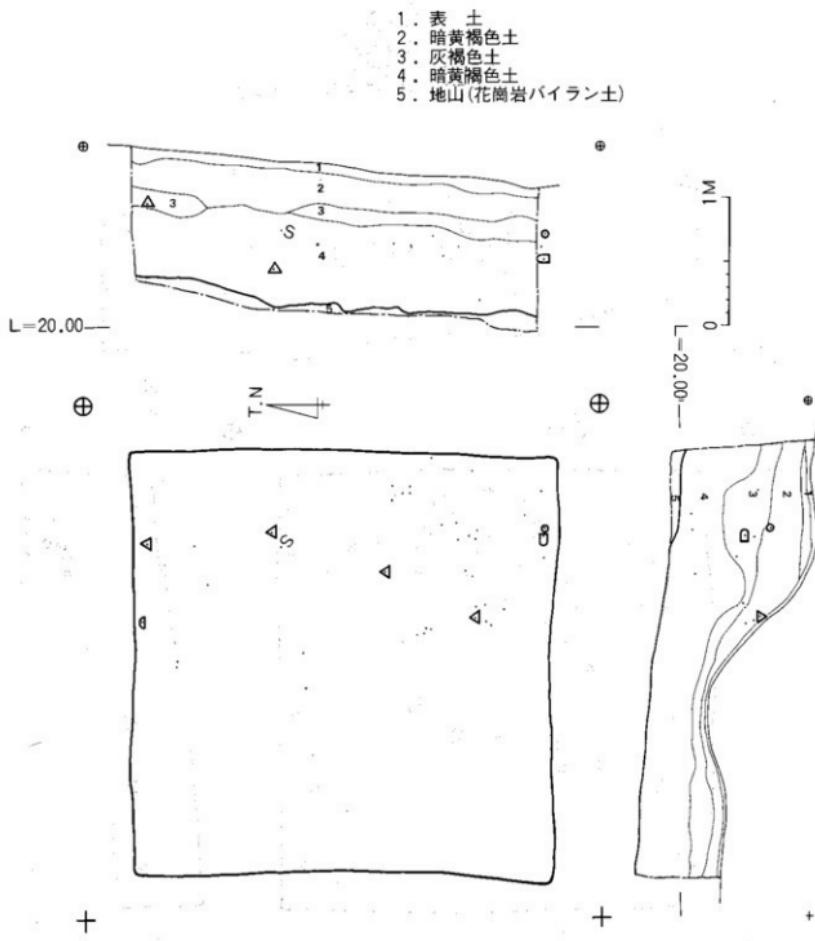
B21グリッド遺物出土状態
(第6面～第8面)

1. 表土
2. 暗黄褐色土
3. 灰褐色土
4. 暗黄褐色土
5. 地山(花崗岩バイラン土)



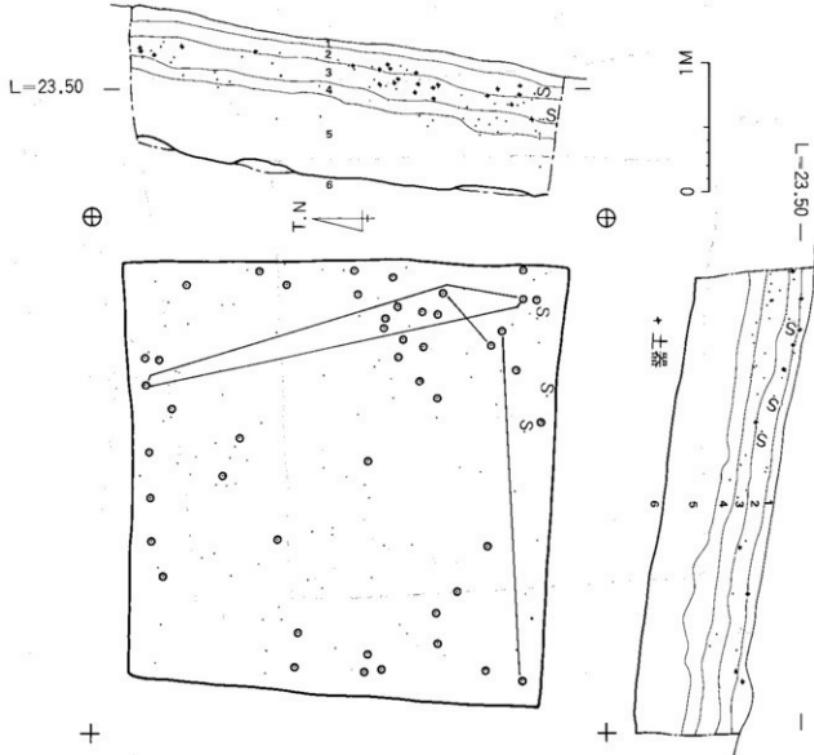
A 26-1 グリッド遺物出土状態(第1面～第3面)

圖版16



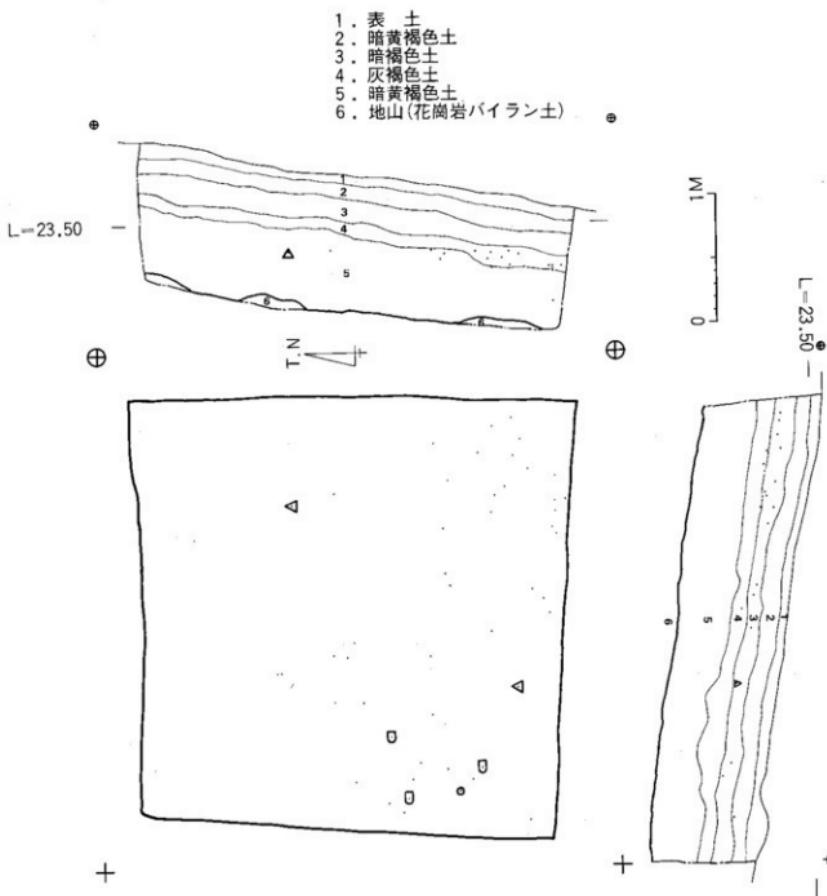
A 26-1 グリッド遺物出土状態(第4面・第5面)

1. 表土
2. 暗黄褐色土
3. 暗灰褐色土
4. 暗黄褐色土
5. 暗黄褐色土
6. 地山(花崗岩バイラン土)



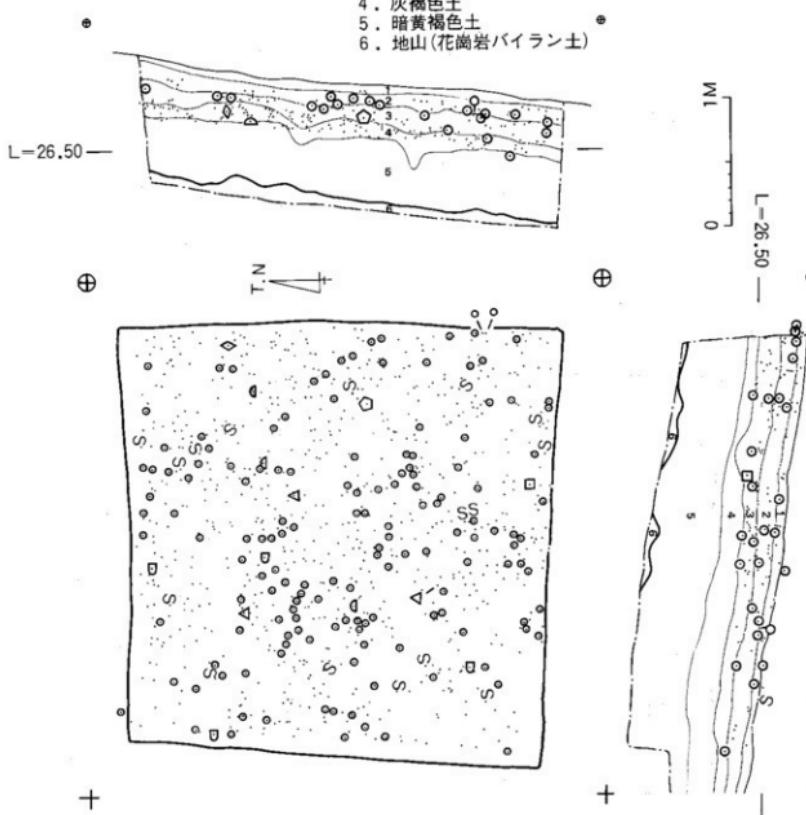
A 31-1 グリッド遺物出土状態（第1面・第2面）

図版18

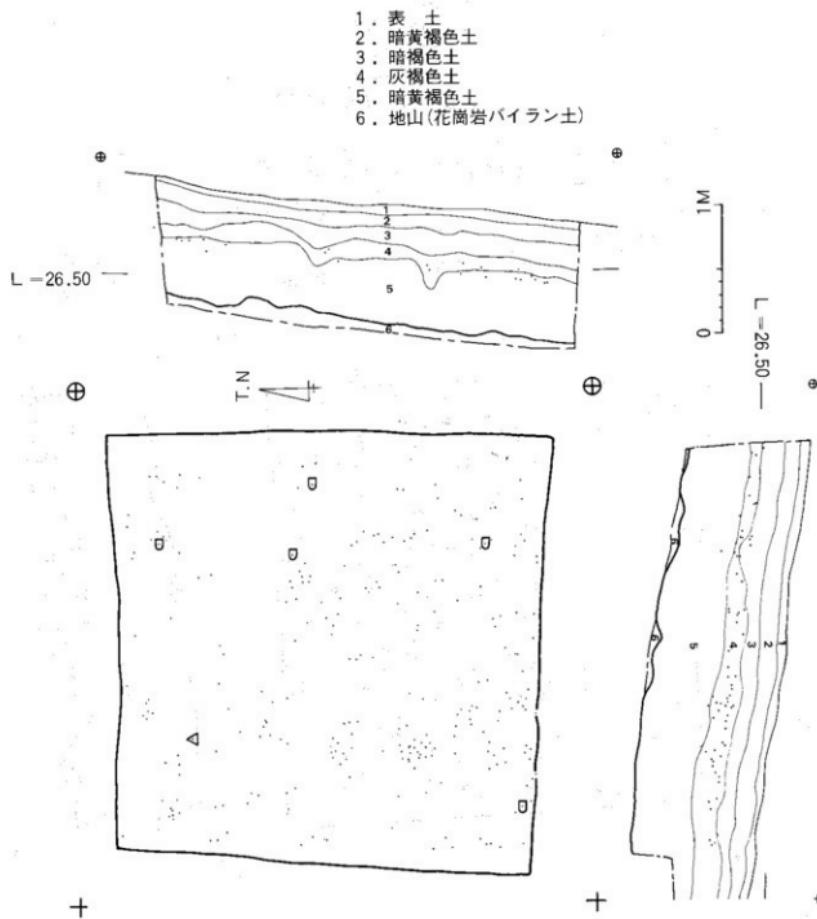


A 31-1 グリッド遺物出土状態（第3面・第4面）

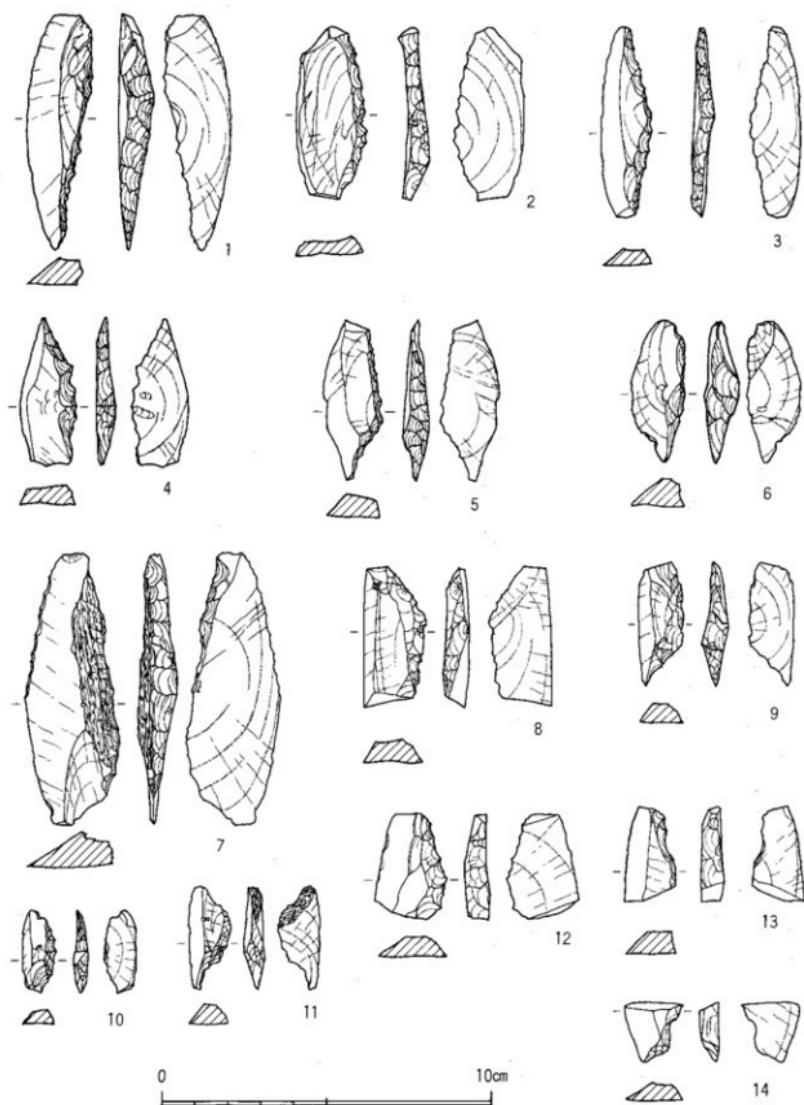
1. 表 土
2. 暗黄褐色土
3. 暗褐色土
4. 灰褐色土
5. 暗黄褐色土
6. 地山(花崗岩バイラン土)



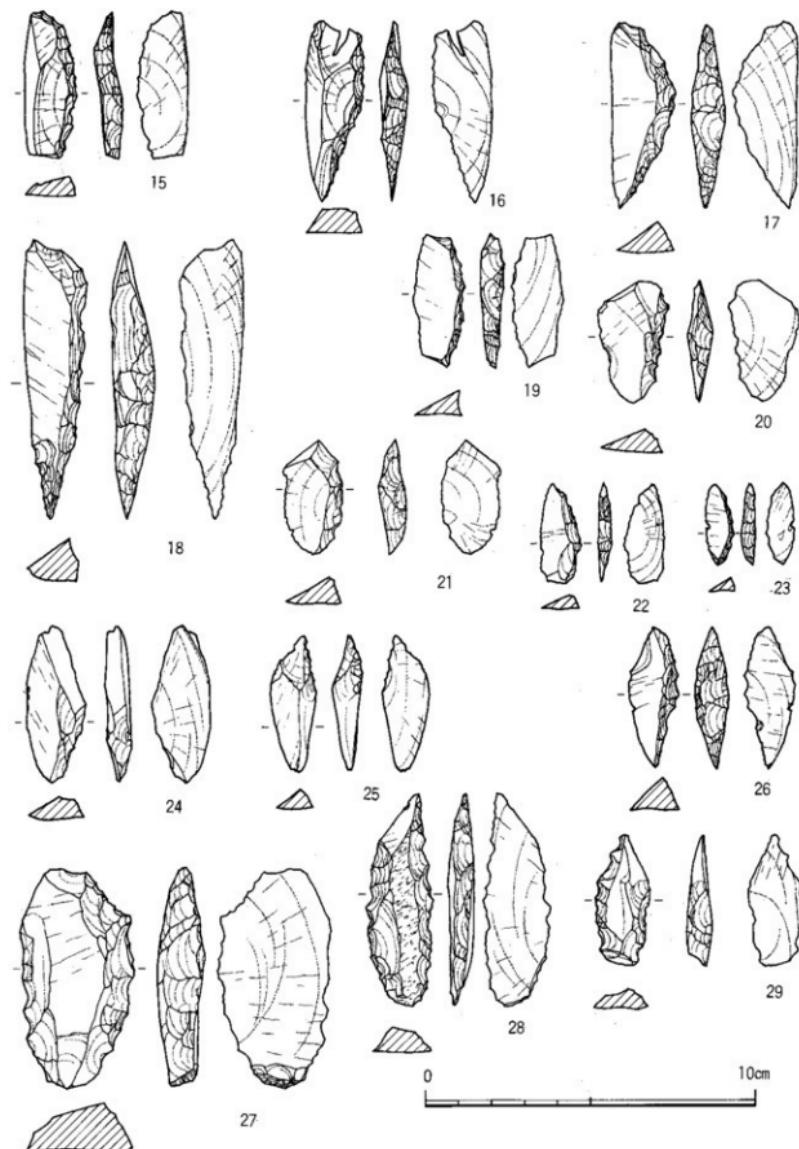
A 36-1 グリッド遺物出土状態 (第1面~第4面)



A 36-1 グリッド遺物出土状態（第5面・第6面）



羽佐島出土石器実測図(1)

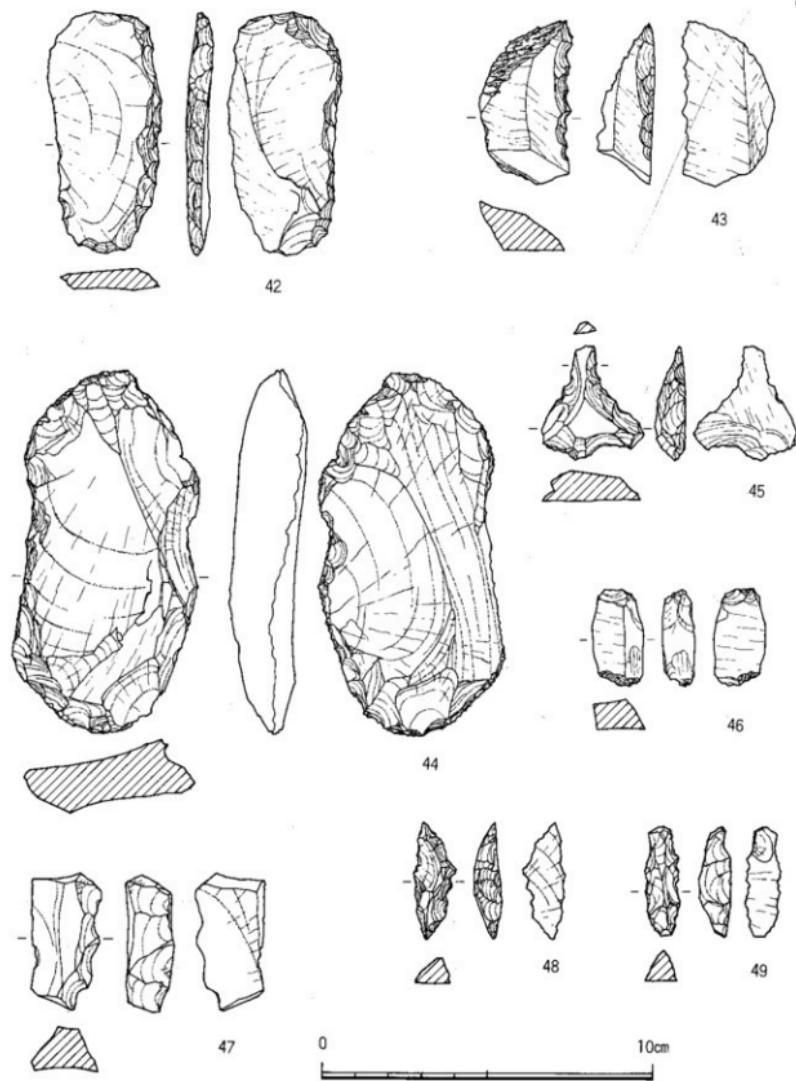


羽佐島出土石器実測図(2)

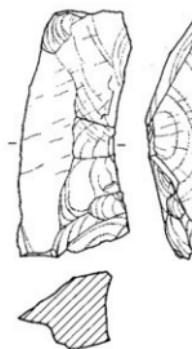


羽佐島出土石器実測図(3)

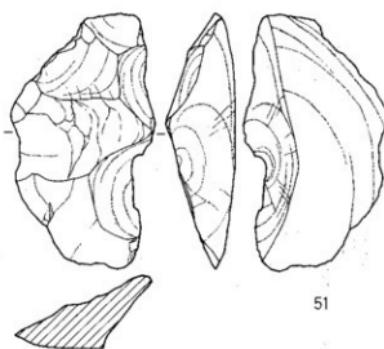
図版24



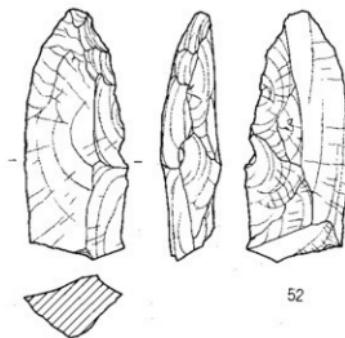
羽佐島出土石器実測図(4)



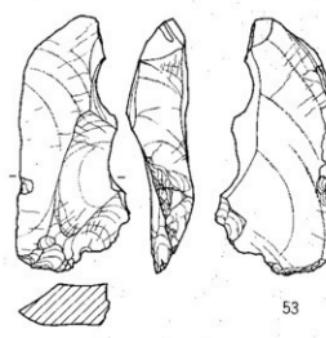
50



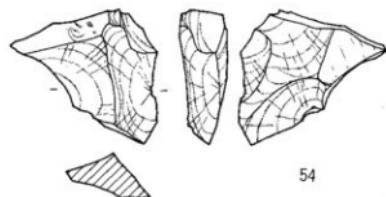
51



52



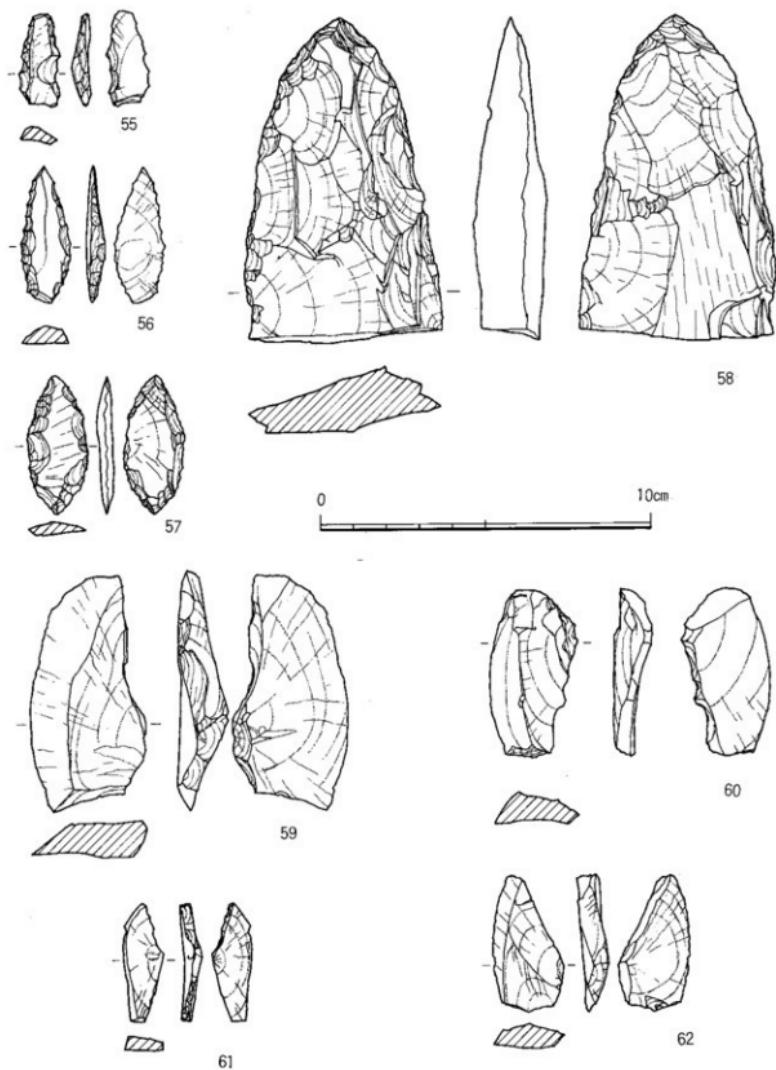
53



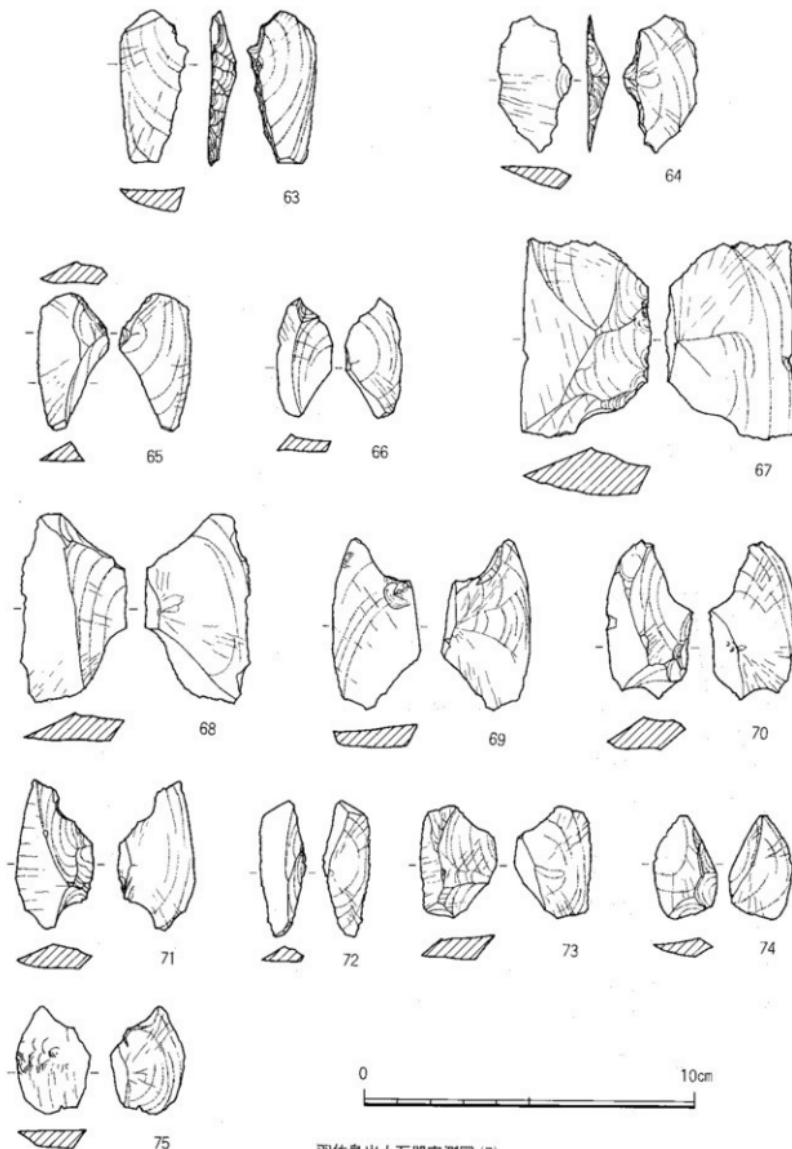
54



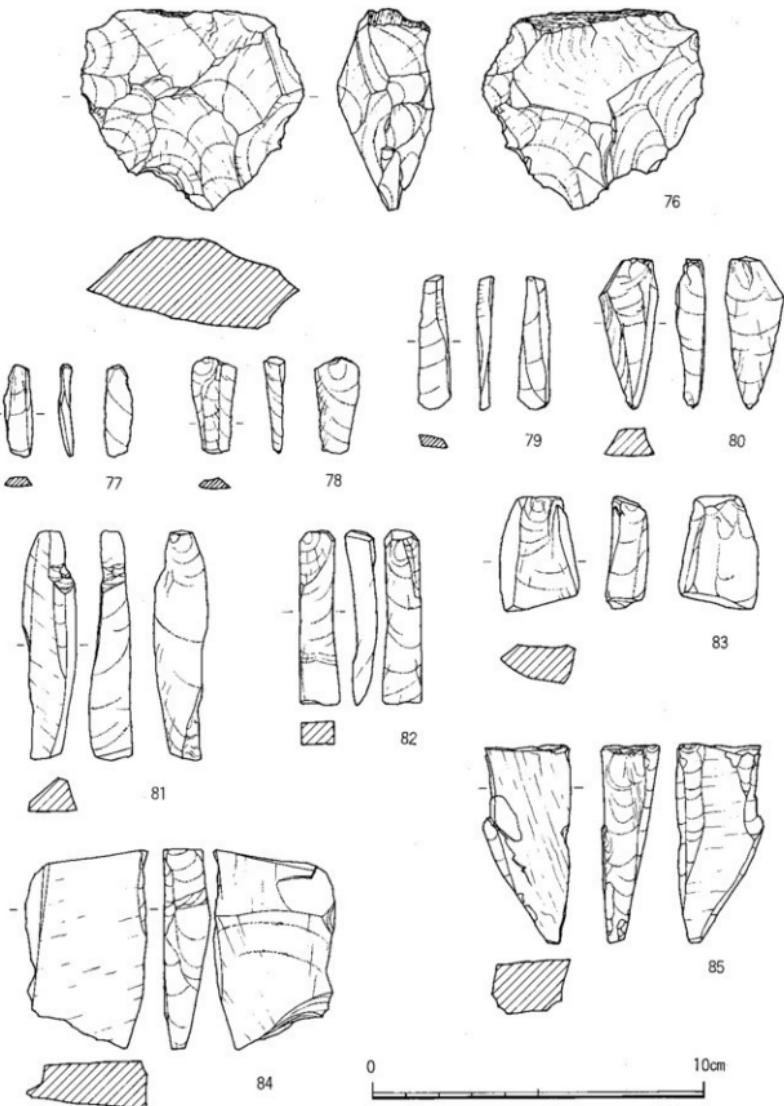
羽佐島出土石器実測図(5)



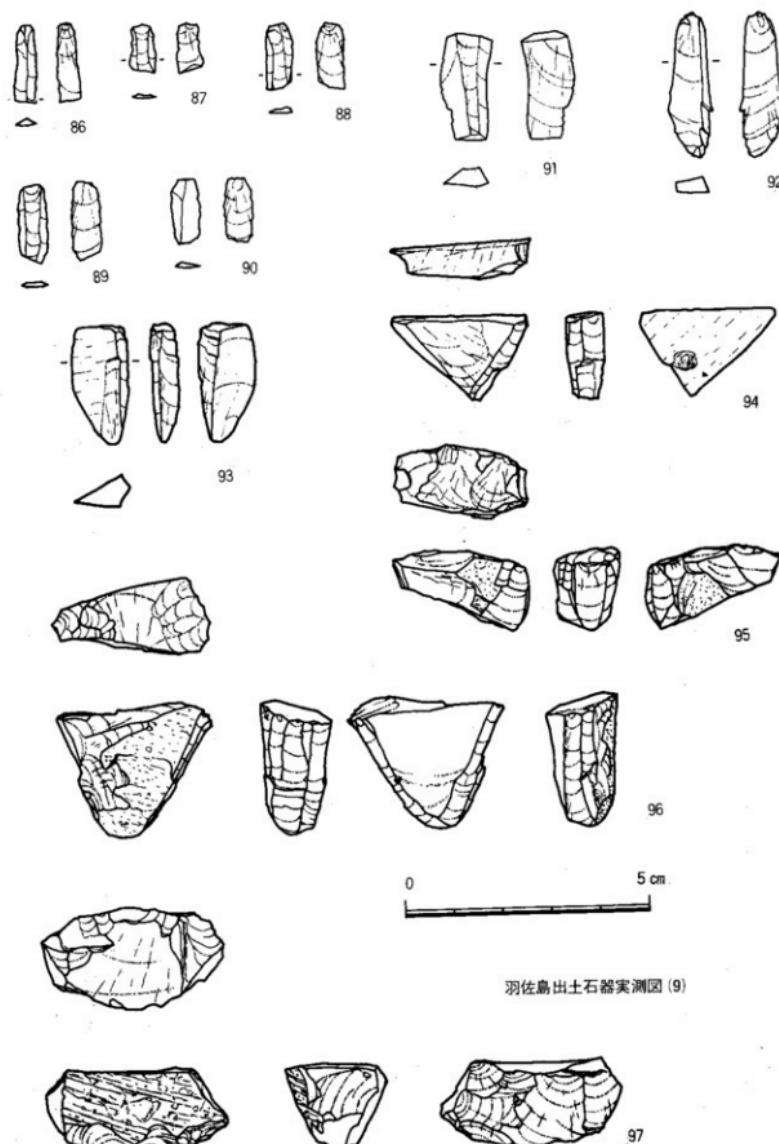
羽佐島出土石器実測図 (6)



羽佐島出土石器実測図(7)

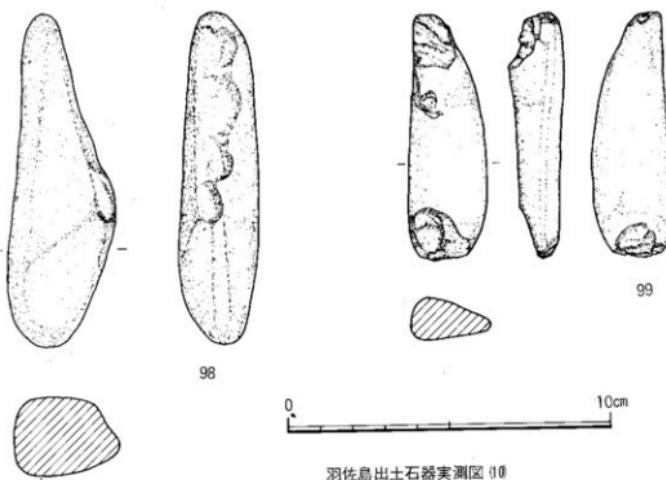


羽佐島出土石器実測図(8)



羽佐島出土石器実測図 (9)

図版30



羽佐島出土石器実測図 10

(1) 羽佐島遺跡（北より・調査前）



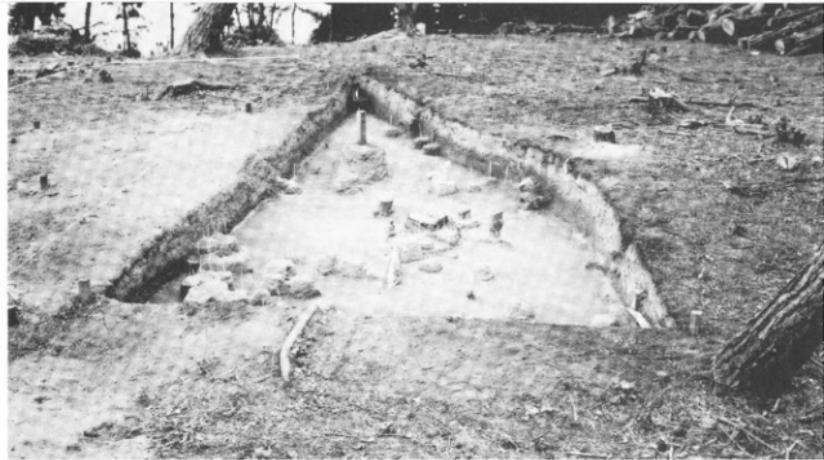
(2) 同上（南より・調査前）



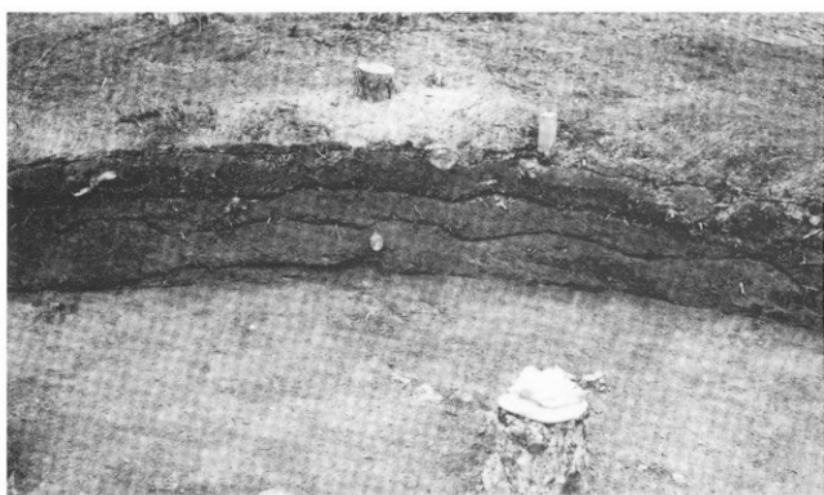
(3) 同上（グリッド設定状態）



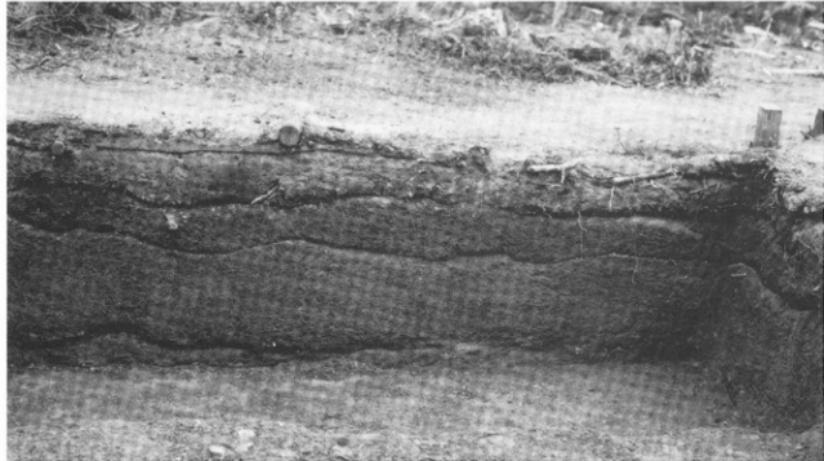
(1) B-1 グリッド遺物出土状態（西より）



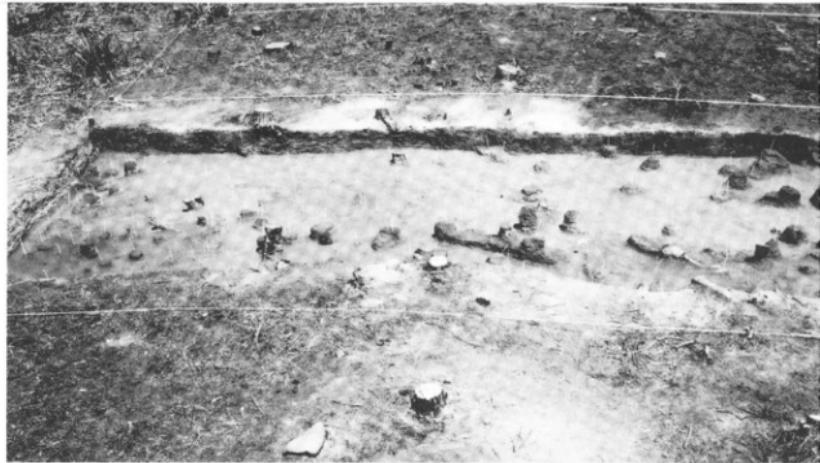
(2) B-1 グリッド南壁（中央部）



(3) B-1 グリッド西壁（北側）



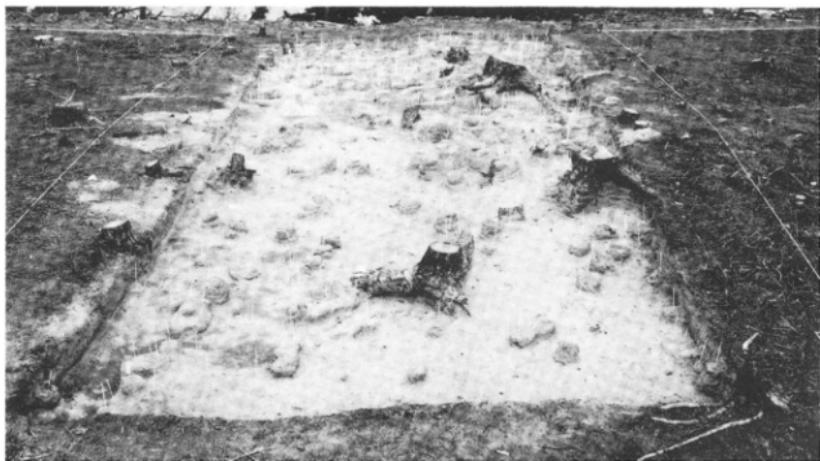
(1) B6 グリッド遺物出土状態
(南より)



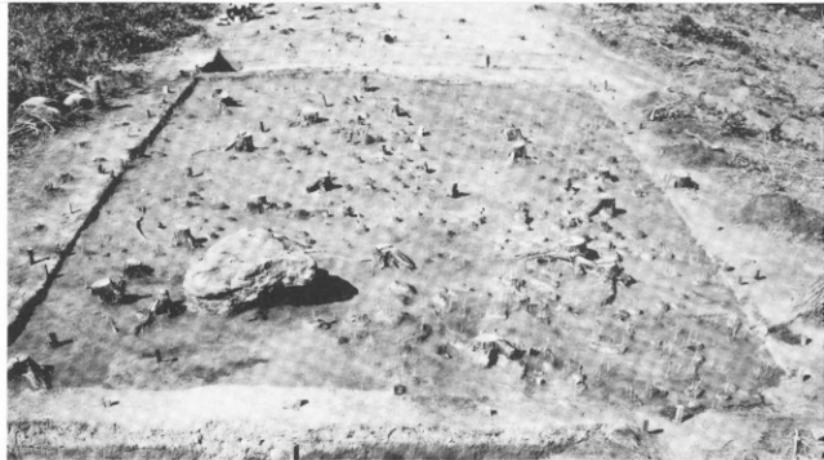
(2) 同上 (グリッド東側・南より)



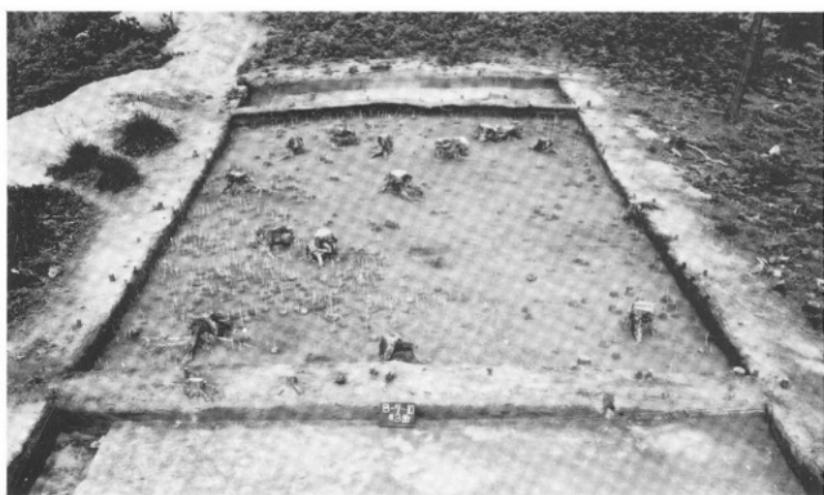
(3) 同上 (西より)



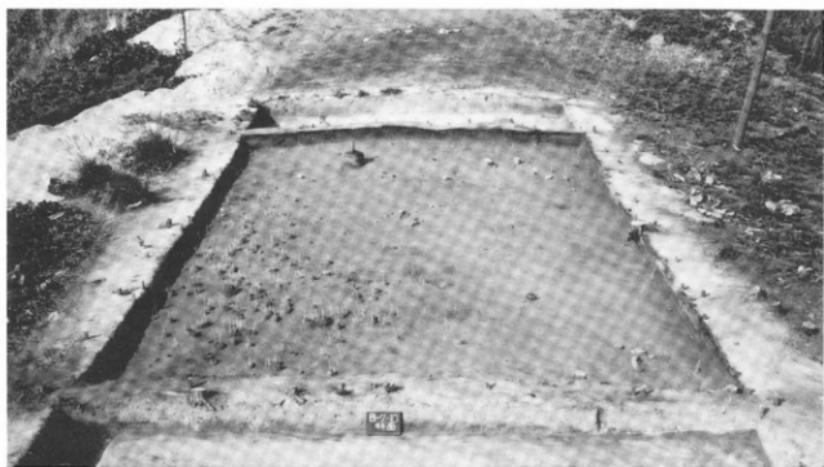
(1) B2～B5グリッド遺物出土状態（南より）



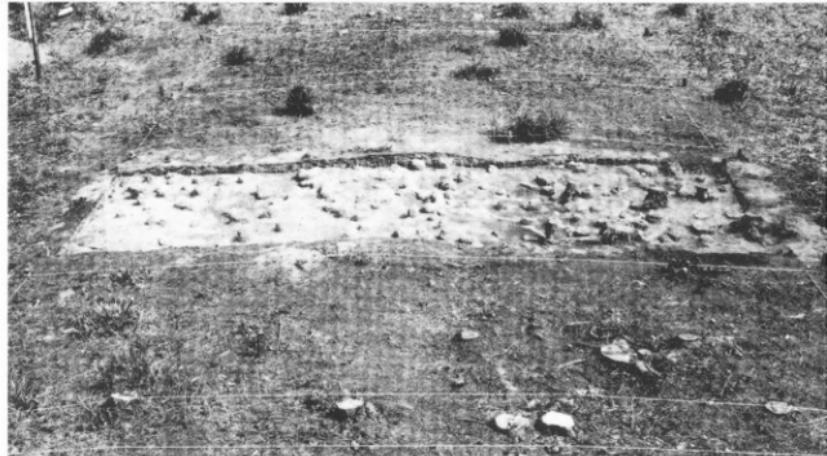
(2) B7～B10グリッド遺物出土状態（第3面・南より）



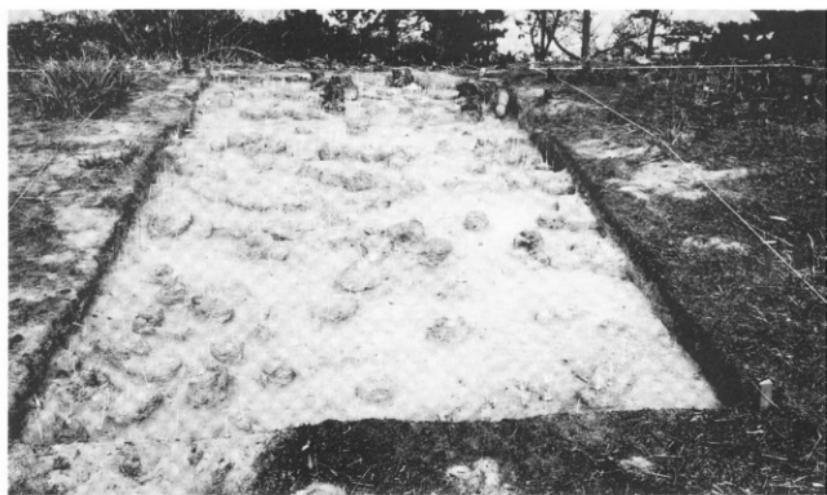
(3) 同上（第4面・南より）



(1) B 16 グリッド遺物出土状態（南より）



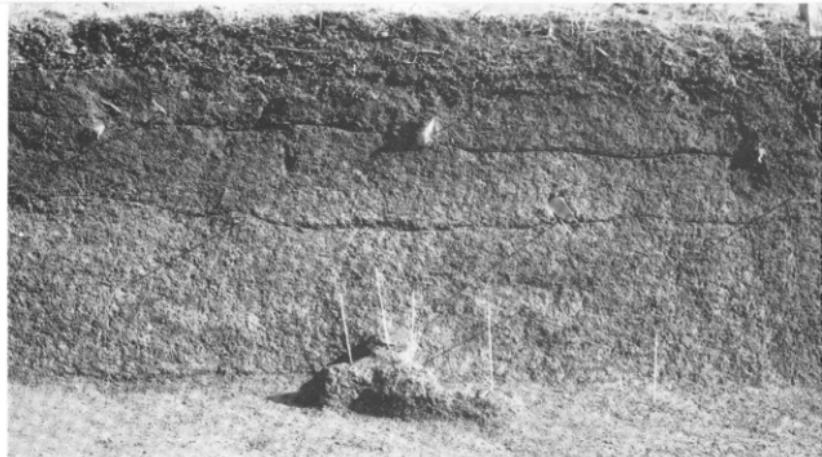
(2) 同上（西より）



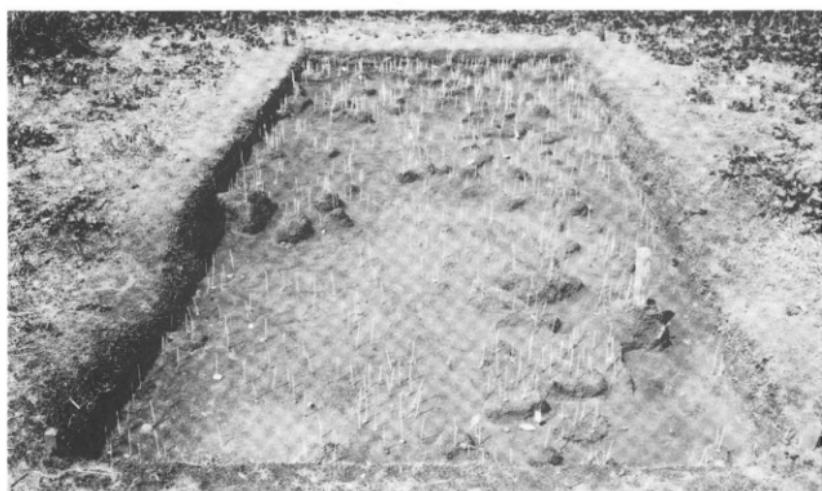
(3) 同上（東より）



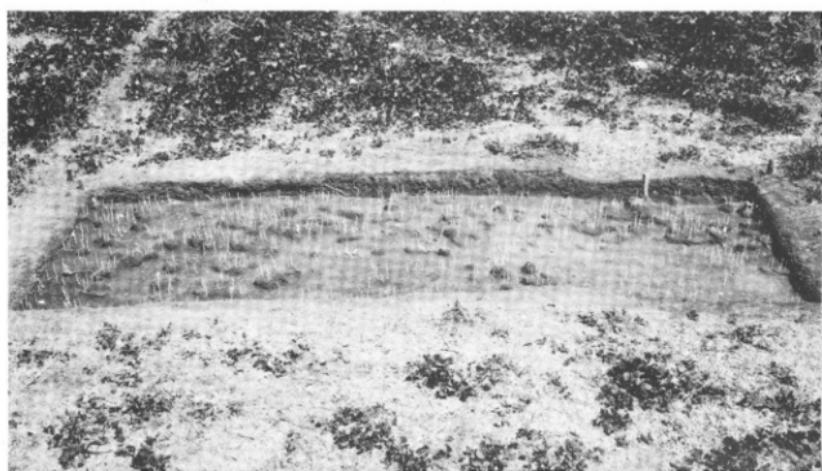
(1)
B 20
グリッド東壁



(2)
B 21
グリッド遺物出土状態（東より）



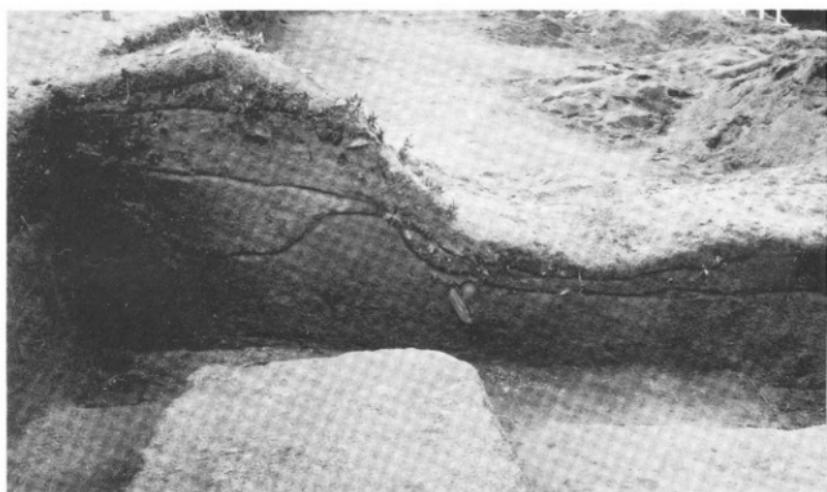
(3) 同上（南より）



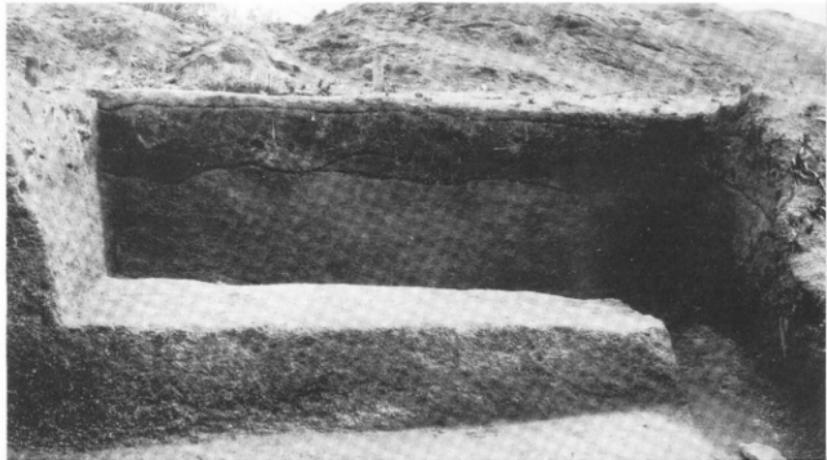
(1) A 26—1 グリッド遺物出土状態(西より)



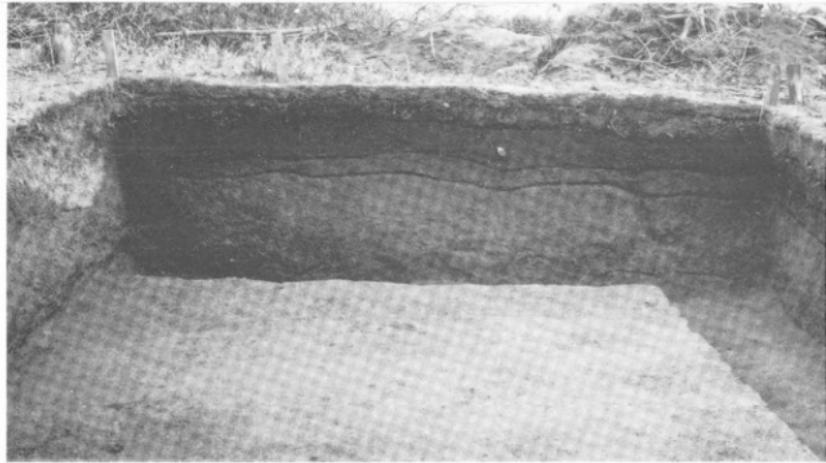
(2) 同上・南壁



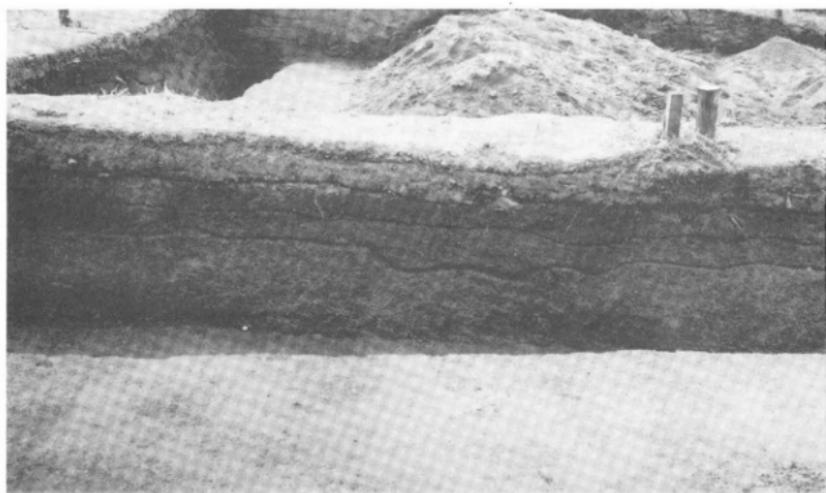
(3) 同上・東壁



(1) A31-1 グリッド東壁



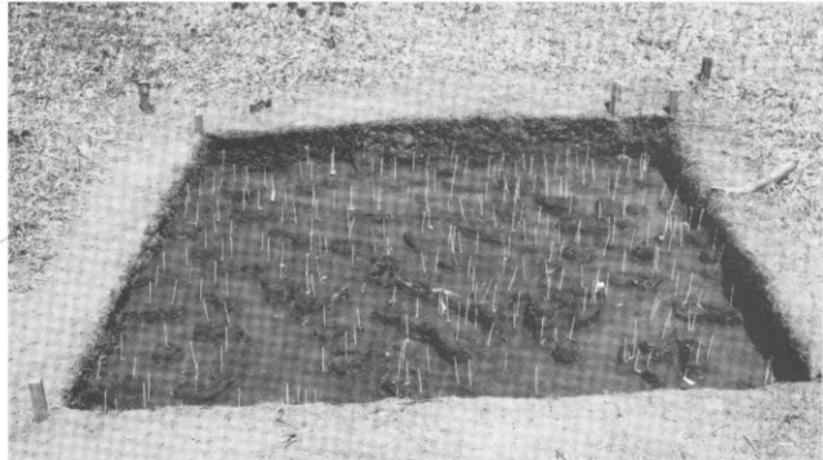
(2) 同上・南壁



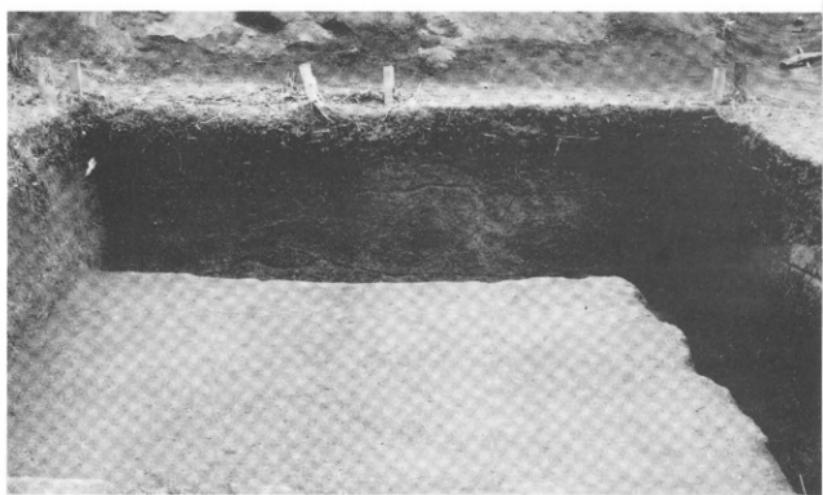
(3) 羽佐島遺跡・北部調査風景（南より）



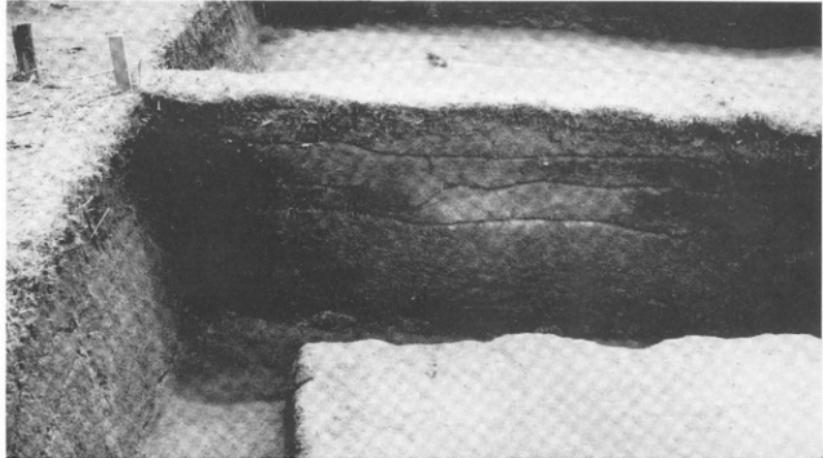
(1) A 36-1 グリッド遺物出土状態(西より)

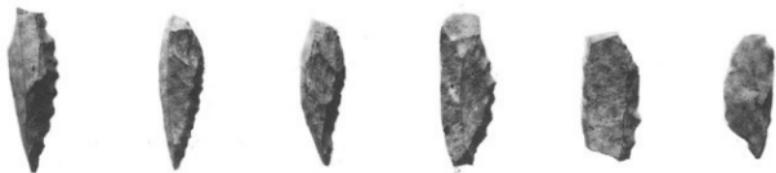


(2) 同上・東壁

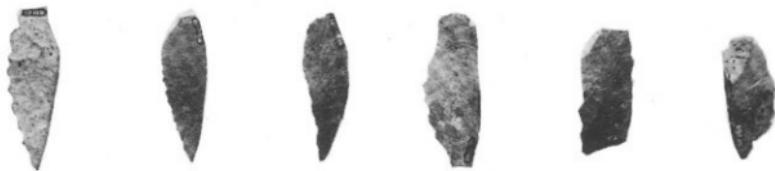


(3) 同上・南壁





(1) ナイフ形石器（背面）



(2) 同 上 (腹面)



(1) ナイフ形石器（背面）



(2) 同 上（腹面）



(1) ナイフ形石器 (背面)



(2) 同 上 (腹面)